多賀城市文化財調査報告書第65集

高　崎　遺　跡

—新田南錦町線関連遺跡発掘調査報告書—

平成14年3月

多賀城市教育委員会
多賀城市建設部道路課

序　　文

多賀城市に所在する多賀城廃寺跡は奈良・平安時代の陸奥国府多賀城の付属寺院です。現在、「多賀城跡附寺跡」として特別史跡の指定を受け、保存・整備しております。これを取り巻くように位置している高崎遺跡は古代から近世にわたる遺跡であることがこれまでの発掘調査で明らかになりました。

本書に収録した高崎遺跡第30・34・35次調査は、都市計画道路「新田南錦町線」に伴う事前調査として市道路課から調査依頼を受けて実施したものです。調査対象地区は多賀城廃寺跡に近接しており、これまで周辺の調査でも廃寺に関わると考えられる数々の遺構、遺物を発見しています。調査の結果、竪穴住居跡や区画溝跡のほか「花會」「寺」をはじめとする多量の墨書土器などが発見されました。このような廃寺跡に関連する遺構、遺物の発見により、廃寺跡周辺のようすがより具体的に把握できるようになりました。今回の調査成果は、これまでの調査成果とあわせて、高崎遺跡の解明につながるものと考えております。

最後になりましたが、発掘調査および資料の整理、そして本書の刊行に際し御協力・御指導いただきました方々に対し、衷心よりお礼申し上げますとともに、本書が、古代史・地方史研究の資料としてご活用いただければ幸いと存じます。

平成14年3月

多賀城市教育委員会
教育長　櫻　井　茂　男

例　　言

1．本書は、平成10年度から12年度にかけて実施した都市計画道路―新田南錦町線―建設に係る高崎遺跡第29（確認調査）・30・34・35次調査の成果をまとめたものである。

2．発掘調査から報告書作成に至る一連の作業は、本件の開発行為に係わる道路課の依頼を受け、埋蔵文化財調査センターが行った。

3．遺構の名称は第1次調査からの一連番号である。

4．平面図における座標値は国土座標「平面直角座標系X」を用いて設定した。

5．挿図中の高さは標高値である。

6．土色は『新版標準土色帖』（小山・竹原：1991）を使用した。

8．出土遺物の内、土器と瓦については「多賀城跡　政庁跡　図録編」（宮城県多賀城跡調査研究所1980）、「多賀城跡　政庁跡　本文編」（宮城県多賀城跡調査研究所　1982）の分類に依拠した。

9．本書の執筆は、Ⅱを石川俊英、その他を齋藤　稔が執筆し、編集は齋藤が行った。また、資料整理および図版作成に際し、臨時職員須藤美智子、熊谷純子、浦風志恵子、伊藤美恵子、高橋知賀子、鹿野智子、渡辺奈緒、小野寺雪子、中村千恵子、坂本英美、横山佳織の協力を得た。

10．本書の作成に際し、近世陶器については関根達人氏（弘前大学）、瓦の分類については高野芳宏氏（東北歴史博物館）、墨書土器については平川　南氏（国立歴史民俗博物館）、石崎高臣氏、三河雅弘氏（総合研究大学院大学）、服部一隆氏（明治大学大学院）のご教示を得た。

11．調査に関する諸記録および出土遺物はすべて多賀城市教育委員会が保管している。

目　　次

例言
目次
調査要項
Ⅰ．遺跡の位置と地理的・歴史的環境 …… 1
Ⅱ．調査に至る経緯 …… 5
Ⅲ．調査方法と経過 …… 5
Ⅳ．発見した遺構と遺物 …… 7
Ⅴ．考察 …… 28
Ⅵ．まとめ …… 29

調査要項

1．調査主体　多賀城市教育委員会　教育長　櫻井　茂男
2．調査担当　多賀城市埋蔵文化財調査センター　所　長　長田　　幹
3．調査協力者　多賀城市建設部道路課

調査次数	所　在　地	調査面積	調　査　期　間	調査担当者
第　29　次	高崎二丁目地内	264㎡	平成11年3月16日～3月26日	石川　俊英 石本　敬
第　30　次	高崎二丁目地内	900㎡	平成11年5月28日～8月6日	石川　俊英 齋藤　稔
第　34　次	高崎三丁目地内	1,700㎡	平成12年6月26日～10月11日	石川　俊英 佐藤　恵子
第　35　次	高崎三丁目地内	400㎡	平成12年10月5日～11月16日	石川　俊英 佐藤　恵子

4．調査参加者　阿部　弘、遠藤　実、大竹重次郎、長田栄太郎、加藤昭一、日下正夫、柴田幸四郎
星　光治、星忠次郎、星　秀雄、松本喜一、矢萩栄四郎、山田吉之助、赤井ひろ子
浅野　眞、岡本典子、小松まり、庄司美智子、菅原吉明、田中ミヨ、田中裕子
大道寺　勉、手嶋與美、橋本　務、南城美岐子、山下裕子、渡辺正一、大河原政夫
鎌田　傳、森　栄一、宮川ハルミ　（平成11～12年）

Ⅰ　遺跡の位置と地理的・歴史的環境

⑴調査区の位置と地理的環境

多賀城市は、宮城県のほぼ中央部に位置する。仙台市の市街地から北東約10kmに位置しており、南西部で仙台市、北西部で利府町、南東部で七ヶ浜町とそれぞれ接している。

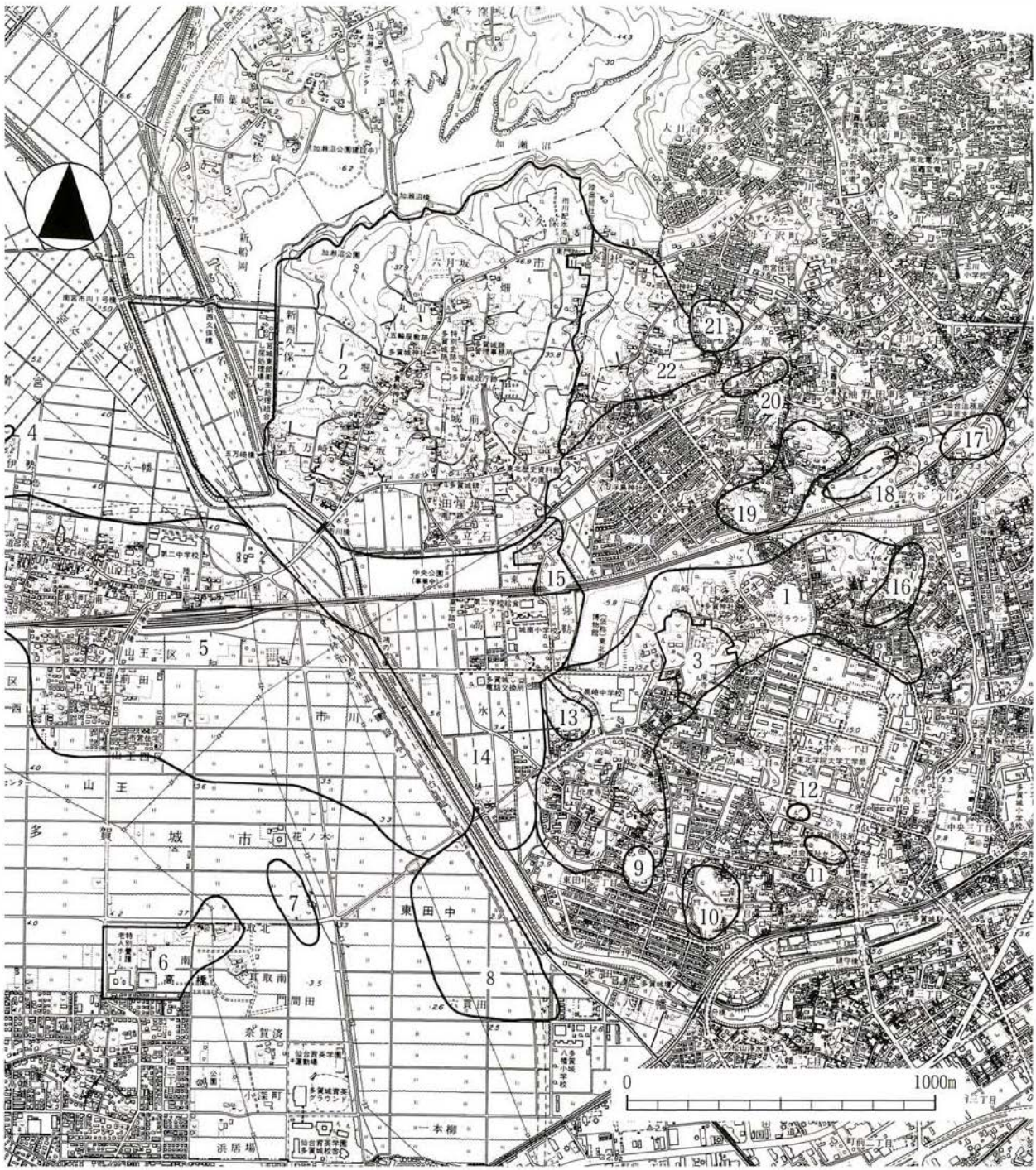
利府町の丘陵地帯に源を発する砂押川は、多賀城市を北西から南東にかけて貫流し、同市の地形を大きく二分している。北部は台地状の緩やかな丘陵であり、南部は広大な沖積平野である。北部の丘陵は地理学的に松島丘陵と呼ばれるものであり、塩釜方面から本市北部に至り、沖積地に向かって枝状に発達している。それらによって大小の谷が形成され、緩やかながら起伏に富んだ地形となっている。高崎遺跡はそのような丘陵上に位置しており、その周辺には数多くの遺跡が隣接している。

今回の対象地区は多賀城廃寺跡南東側の隣接地にあたる。地形的に詳しくみると、北端部は多賀城廃寺跡から延びる丘陵部であり、そこから南西方向の谷に向って低くなっている。南端部は緩やかな起伏をもつ低丘陵となっており、北端と南端の距離は560m、比高差は約17mである。調査区の現況は田畑と宅地であるが、対象地区のほぼ中央には近年まで池があったことがわかっている。

⑵歴史的環境

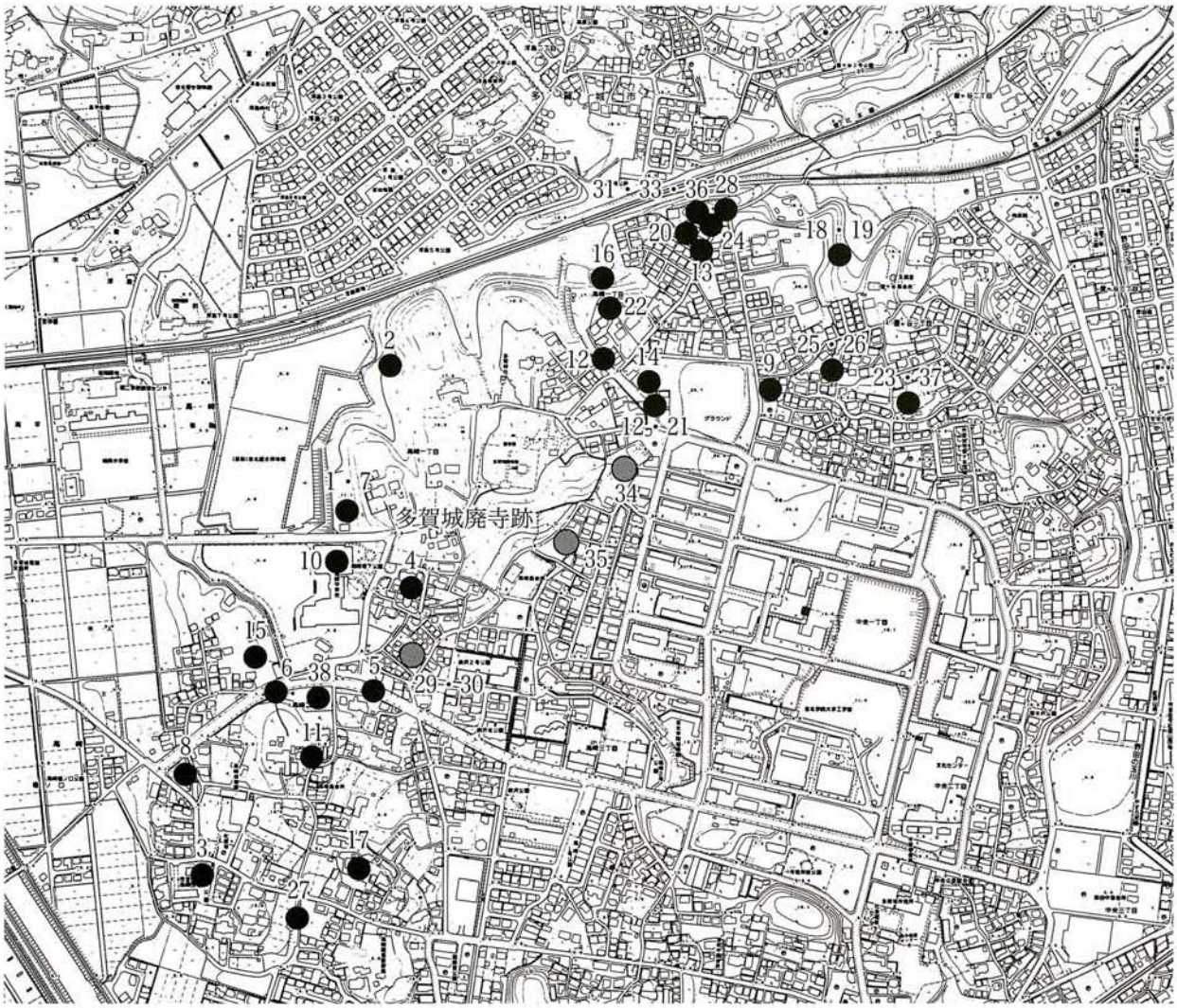
本遺跡は、古墳時代から近代にかけての複合遺跡で、特に奈良･平安時代の遺構が多数発見されている。本遺跡の北西の丘陵上には奈良・平安時代の陸奥国府である多賀城跡があり、奈良時代には鎮守府も置かれていた。本遺跡のほぼ中央部の低丘陵上には付属寺院である多賀城廃寺跡がある。大宰府の観世音寺と同様の伽藍配置であり、寺名も「観音寺」であることが推定されている。創建・廃絶の年代も多賀城跡とほぼ同じである。同時代の遺構は本遺跡の各地点から発見されている。多賀城廃寺跡の南西約200mに位置する弥勒地区では、80棟近い竪穴住居跡や南北に長い掘立柱建物跡など数多くの遺構を発見している。また、灰釉陶器大型手付瓶やミニチュアの長頸瓶、鉄製匙などがまとまって出土した竪穴住居跡があり、付近から仏器である灰釉陶器の浄瓶なども出土していることから一般庶民の集落とは異なるものと考えられる。井戸尻地区では、大量の灯明皿が一括廃棄された遺構を発見し、万燈会のような仏教儀式に関わるものと推定されている。また、いずれの地区でも掘立柱建物跡や竪穴住居跡、土器埋設遺構などを発見している。

古墳時代の遺構としては、多賀城廃寺跡の調査の際に前期の竪穴住居跡が３棟発見されているほか、表地区においても３棟発見されており、そのうち中期ものは石製模造品の工房跡と思われる。近世の遺構としては、弥勒地区で江戸時代の屋敷跡を調査しており、多数の掘立柱建物跡と地鎮遺構を発見している。また、上野地区では昭和時代の巨大な井戸跡が発見されている。太平洋戦争時、高崎周辺には海軍工廠に関連する施設が置かれており、それにかかわる遺構の可能性がある。戦時下における貴重な調査例といえよう。



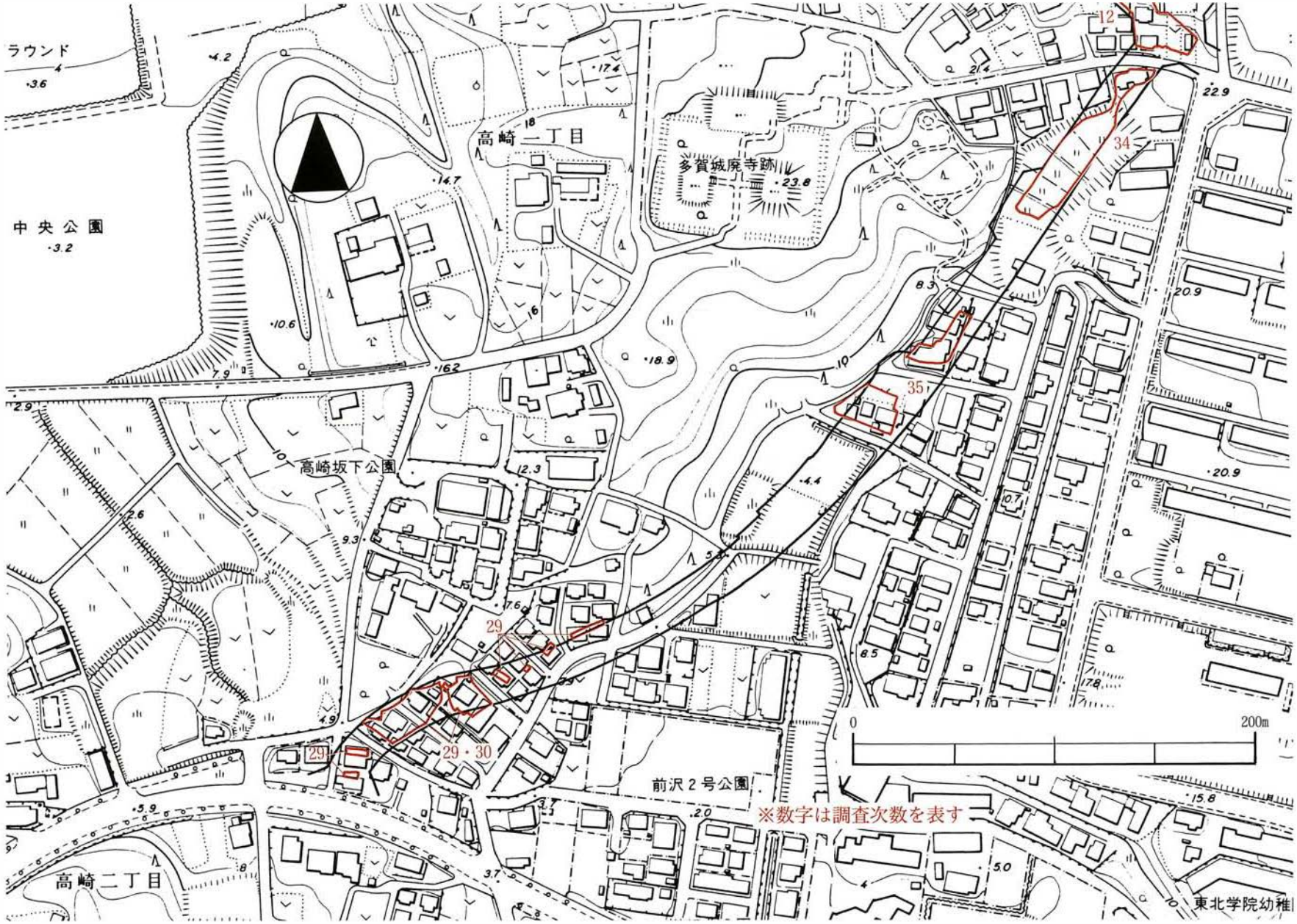
番号	遺跡名	時代	立地	番号	遺跡名	時代	立地
1	高崎遺跡	奈良・平安・中世・近世・近代	丘陵	11	桜井館跡	中世	丘陵
				12	稲荷殿古墳	古墳（後）	丘陵
2	特別史跡多賀城跡	奈良・平安	丘陵 仲軽平野	13	高崎古墳群	古墳	丘陵端
				14	市川橋遺跡	旧石器～平安	仲軽平野
3	特別史跡多賀城廃寺跡	奈良・平安	丘陵	15	館前遺跡	古代・中世	分離丘陵
4	内館館跡	中世	自然堤防	16	留ヶ谷遺跡	古代・中世	丘陵
5	山王遺跡	古墳・奈良・平安	自然堤防	17	矢作ヶ館跡	古代・中世	丘陵
6	大日南遺跡	平安・中世・近世	自然堤防	18	野田遺跡	古代・中世	丘陵中腹
7	大日北遺跡	古代・近世	自然堤防	19	小沢原遺跡	古代・中世	丘陵
8	六貫田遺跡	古代	自然堤防	20	高原遺跡	古代・中世	丘陵
9	東田中鎧前遺跡	古代・中世	丘陵麓	21	法性院遺跡	古代	丘陵中腹
10	志引遺跡	古代・中世	丘陵	22	西沢遺跡	古代・中世・近世	丘陵

第１図　遺跡分布図



調査次数	主な発見遺構	主な出土遺物	調査次数	主な発見遺構	主な出土遺物
1	古代：倉口甕棺		15	古代：竪穴住居	
2		瓦	16	古代：掘立柱建物、竪穴住居 近代：大井戸	円面硯、灯明皿
3	古代：埋甕				
4	古代：柱列	風字硯	17	古墳：竪穴住居 古代：竪穴住居 中世：掘立柱建物	石製模造品 漆紙 青磁、施釉陶器花瓶
5	古代：掘立柱建物、竪穴住居 中世：土壙	灰釉陶器椀、円面硯 無釉陶器擂鉢			
6	古代：掘立柱建物、竪穴住居 柱列、井戸、合口甕棺 中世：溝	墨書土器 青磁椀	18・19	縄文：包含層 古代：掘立柱建物、竪穴住居 中世：掘立柱建物	石鏃 白磁、青磁
7	古代：掘立柱建物 近世：屋敷、地鎮遺構	輪宝墨書土器、古銭	21	古代：竪穴住居	
			22	古代：竪穴住居	
8	古代：掘立柱建物、井戸、道路 中世：掘立柱建物　近世：道路	墨書土器	23	中世：平場、柱穴	
			24	土器	
9	古代：竪穴住居		25・26	古代：掘立柱建物、竪穴住居 近世：墓	須恵器擂鉢 漆器椀、施釉陶器椀
10	古代：掘立柱建物、竪穴住居 工房	灰釉陶器瓶、鉄製鉈、漆紙文書、羽口、送風管 鍛造剥片	27	古代：柱穴	
			28	柱列、溝	
11	古代：竪穴住居、石組暗渠 灯明皿捨て場 中世：大溝	灯明皿、青磁椀 瓦質土器擂鉢	29・30	本書	
			31	古代：土壙、溝	
12	古代：掘立柱建物、竪穴住居、溝 土器埋設遺構 中世：掘立柱建物、井戸		33	古代：土壙 近世以降：土壇	
			34・35	本書	
			36	古代：溝	
13			37	古代：掘立柱建物、竪穴住居、溝	
14	古代：溝		38	古代：溝	

第２図　調査区位置図


ラウンド
中央公園
高崎一丁目
多賀城廃寺跡
高崎坂下公園
前沢２号公園
高崎二丁目
東北学院幼稚
12
34
35
29
29・30
29
0
200m
※数字は調査次数を表す

第３図　トレンチ配置図

II　調査に至る経緯

都市計画道路―新田南錦町線―は、仙台市東部と塩竈市を結ぶ幹線道路で、特別史跡多賀城跡附寺跡や東北歴史博物館へのアクセス路として位置づけられている。都市計画道路―史跡連絡線―と接続することにより市街地を連絡する路線である。本道路は、昭和36年３月２日付けで都市計画決定され、平成３年に事業を認可されている。平成10年、道路建設と埋蔵文化財の関わりについて、道路課と文化財課とで協議が行われ、調査対象面積は約7,800㎡で事前調査の対象としたこと、調査期間については３ケ年で実施すること、初年度は用地買収が進んだ南半部を調査対象範囲とすることなどが決定した。同年６月29日付けで教育長に発掘調査の依頼があり、翌年の平成11年３月16日から用地買収が終了している南半部の2,700㎡を対象に遺構の分布と密度について確認することを目的とした第29次調査を行った。

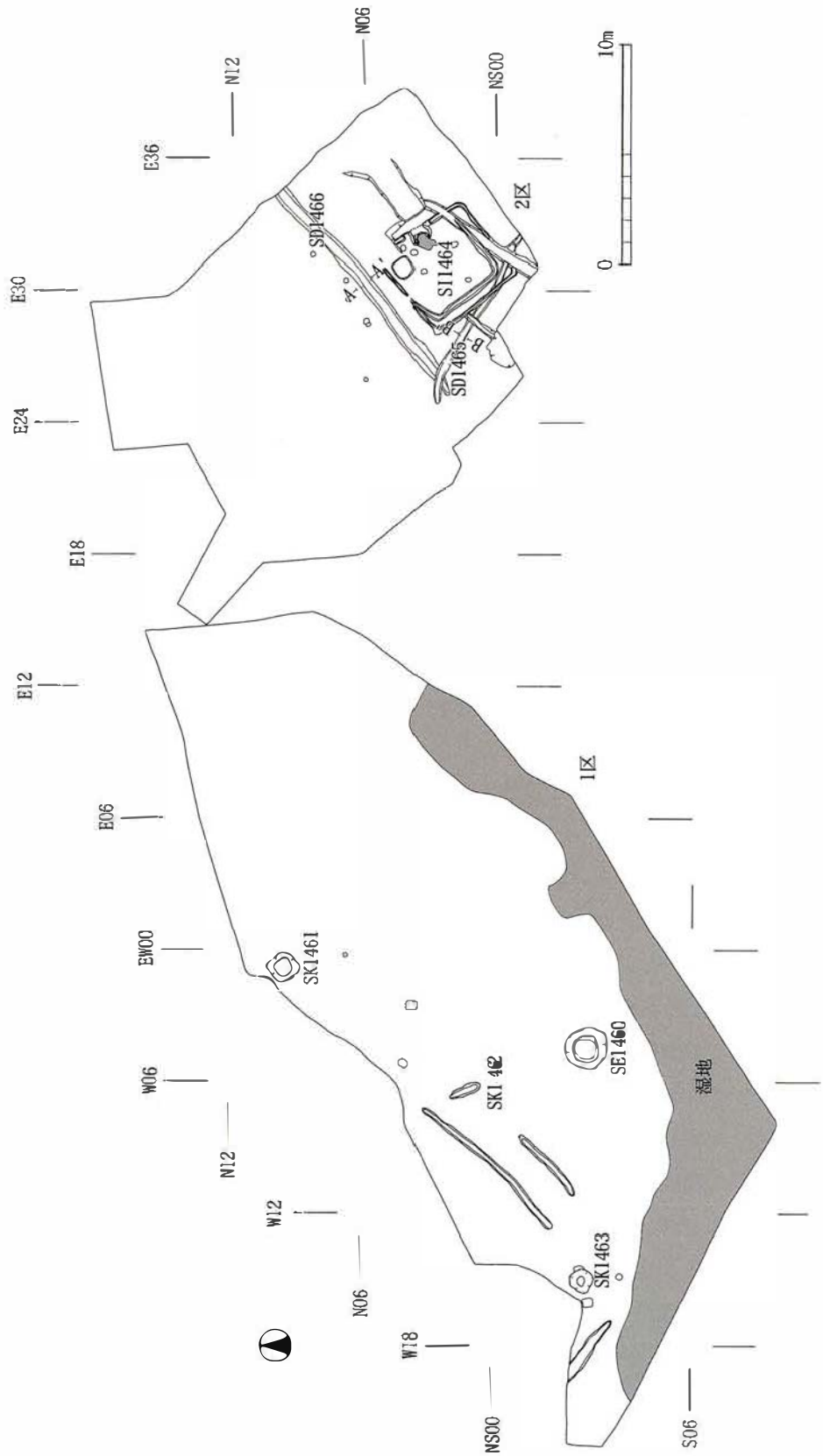
III　調査方法と経過

基準点作成にあたっては、国土座標「平面直角座標系Ｘ」を使用して原点（Ｘ＝－189360.000　Ｙ＝14550.000）を設定し、これを通る南北方向の直線を南北基準線、それと直交する東西方向の直線を東西基準線とした。この原点を０として、南北方向は北をＮ、南をＳとし、そこから１ｍごとにＮ１、Ｎ２、Ｎ３…、Ｓ１、Ｓ２、Ｓ３…、と表した。東西方向は西をW、東をＥとし、同様に表した。

初年度である平成10年度は、調査対象区南半における確認調査として第29次調査を行った。設定した調査区は南から北にそれぞれ１～８トレンチとした。３月16日、調査区内に器材を搬入し、調査に着手した。３トレンチでは盛土の下で井戸跡などの遺構を確認し、３月19日にはおおよその分布を把握するに至った。３月26日、調査を終了した。

平成11年度は第30次調査を行った。調査区は第29次調査で井戸跡を発見した３トレンチを中心とする南側を１区、前年度に調査ができなかった北側を２区とした。５月28日、調査区内に器材を搬入し、調査に着手した。６月10日、１区では井戸跡、土壙、小溝跡などを発見した。６月22日、井戸跡から近世陶器が出土し、古代と考えていた井戸跡が近世であることが判明した。６月28日、２区で竪穴住居跡と溝跡を発見した。竪穴住居跡はその東側が調査区外へのびていたため、７月８日に拡張しその全容を確認した。７月12日、１区の調査を終了する。８月３日、竪穴住居跡が２時期の変遷があることを確認した。８月５日、竪穴住居跡の実測図を作成し、全ての調査を終了した。

平成12年度は前年度に用地買収が終了した北半部を対象として、第34次調査と第35次調査を行った。第34次調査は、多賀城廃寺から東に約150m離れた地点を調査した。地形上の制約から調査区を２つに分け、北東側をＡ区、南西側をＢ区とした。６月26日、調査区内に器材を搬入し調査に着手した。７月13日、Ａ区で第12次調査で発見したSD1130・1150の南側延長部分にあたる溝跡を発見した。７月17日、Ｂ区では掘立柱建物跡、溝跡、土壙を発見した。８月22日、実測図作成を完了し、Ａ区の調査を終了する。10月12日、Ｂ区の調査を終了した。第35次調査は、多賀城廃寺から南東に約120mの地点を調査した。調査区は、東西の道路を挟んで北側をＣ区、南側をＤ区とした。10月12日、調査区に器材を搬入し調査に着手したが、遺構は発見できず灰白色火山灰が自然堆積する湿地であることが判明した。11月15日、調査を終了した。



第４図　第29・30次調査遺構全体図

Ⅳ　発見した遺構と遺物

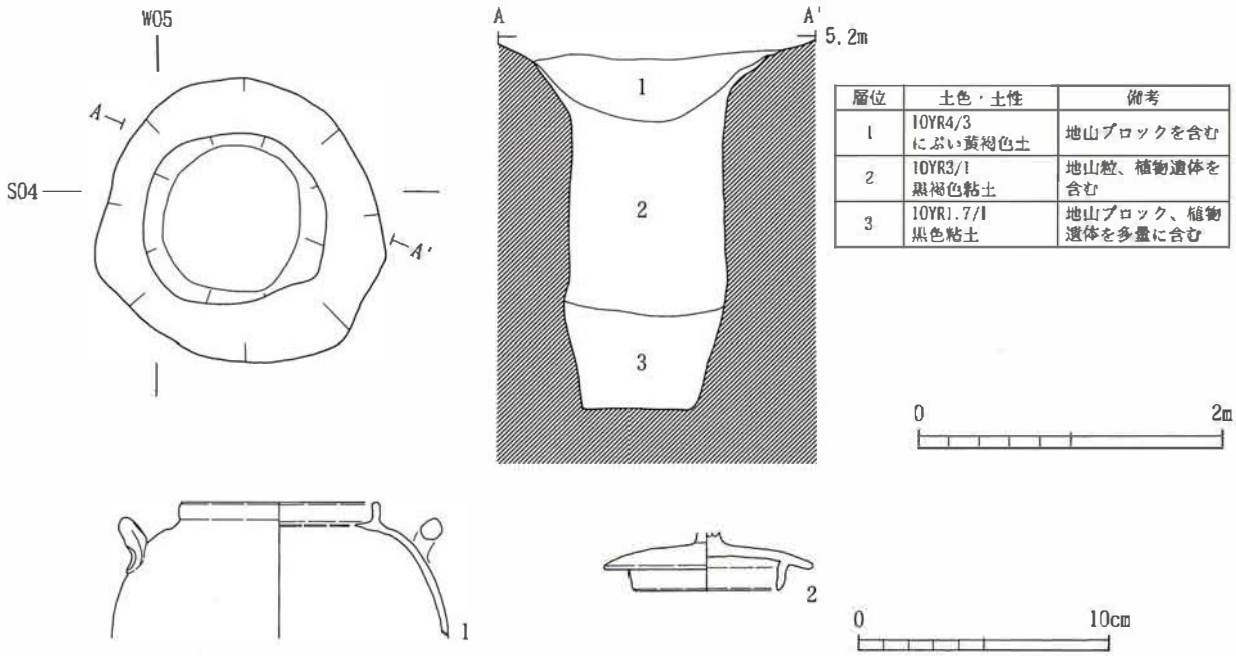
1. 第29・30次調査

第30次調査では、竪穴住居跡１棟、井戸跡１基、土壙３基、溝跡２条、その他小溝跡、ピットを発見した。これらは全て地山上で発見した。また、これら遺構や堆積土から土師器、須恵器、丸瓦、平瓦、白磁などが出土した。以下、調査区ごとに主な遺構と遺物について記述する。

１区

SE1460井戸跡

調査区の中央部からやや南の位置で発見した素掘りの井戸跡である。上部は擂鉢状を呈しており、下半部は円筒状になるよう垂直に掘り込まれている。規模は上半部が直径1.9m、下半部は直径0.9m、深さは2.5mである。埋土は３層でいずれも自然堆積である。遺物は、須恵器甕、平瓦（ＩＡ類）、近世陶器、不明木製品が出土している。近世陶器は釉や胎土の特徴などから大堀相馬産と考えられる。



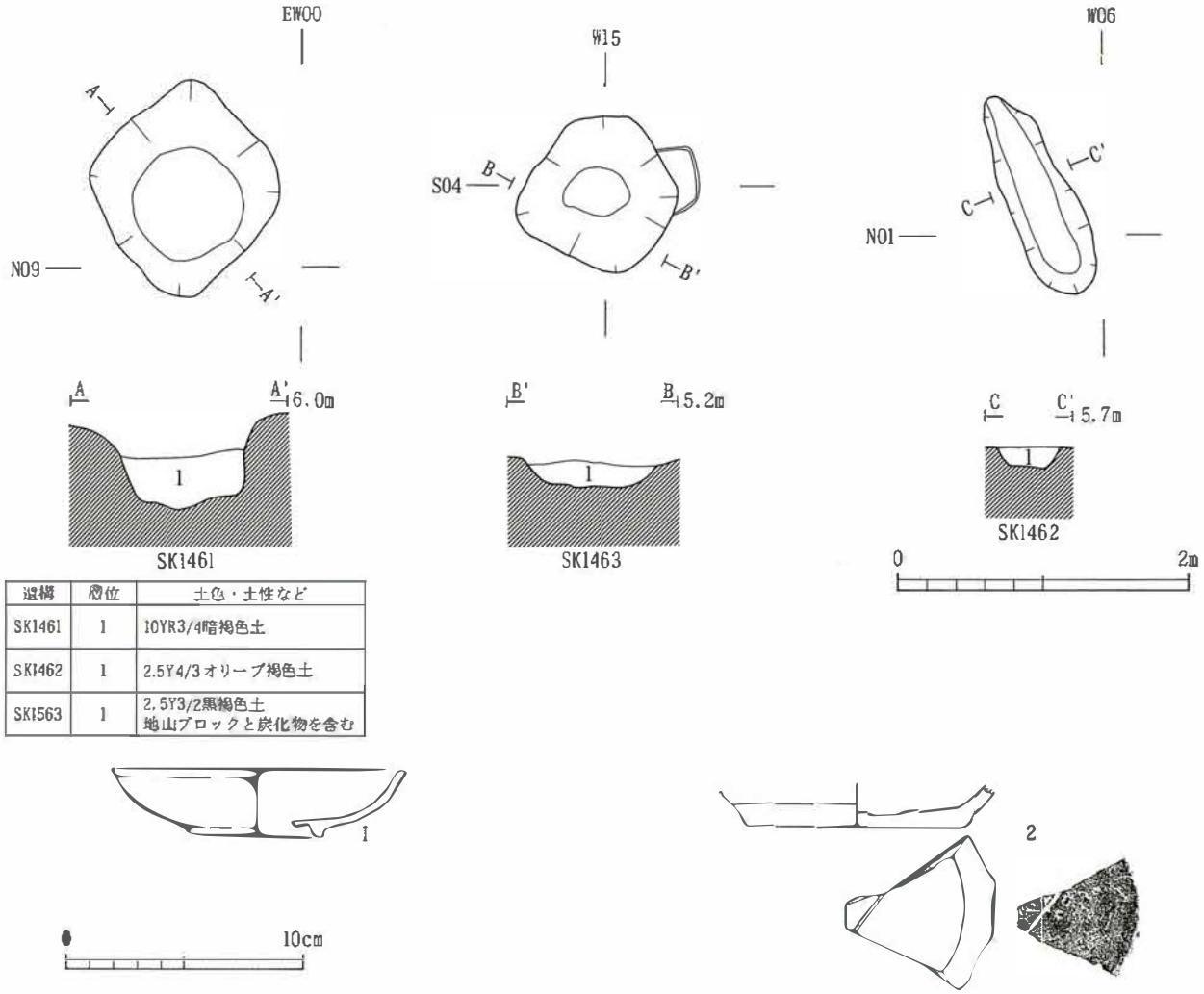
層位	土色・土性	備考
1	10YR4/3 にぶい黄褐色土	地山ブロックを含む
2	10YR3/1 黒褐色粘土	地山粒、植物遺体を含む
3	10YR1.7/1 黒色粘土	地山ブロック、植物遺体を多量に含む

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SE1460	2層	陶器	土瓶	【外面】灰釉（緑灰色）文様なし 【内面】施釉なし、文様なし	(8.0)	—	—	2－4	2
2	SE1460	3層	陶器	蓋	【外面】灰釉（緑灰色）・文様なし 【内面】施釉なし、文様なし	(8.25)	—	—	2－3	3

第５図　SE1460井戸跡平面図・断面図・出土遺物

SK1461土壙

調査区の北側に位置している。平面形は方形である。規模は一辺約1.2m、深さ50～54cmである。壁はやや垂直に立ち上がっている。埋土は１層で自然堆積と思われる。遺物は近世陶器が出土している。



遺構	層位	土色・土性など
SK1461	1	10YR3/4暗褐色土
SK1462	1	2.5Y4/3オリーブ褐色土
SK1563	1	2.5Y3/2黒褐色土 地山ブロックと炭化物を含む

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SK1461	1層	陶器	小椀	【外面】ロクロナデ→施釉　底部：高台貼付 【内面】ロクロナデ→施釉	(12.3)	(5.6)	2.8		44
2	SK1463	1層	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	—	(9.0)	—		16

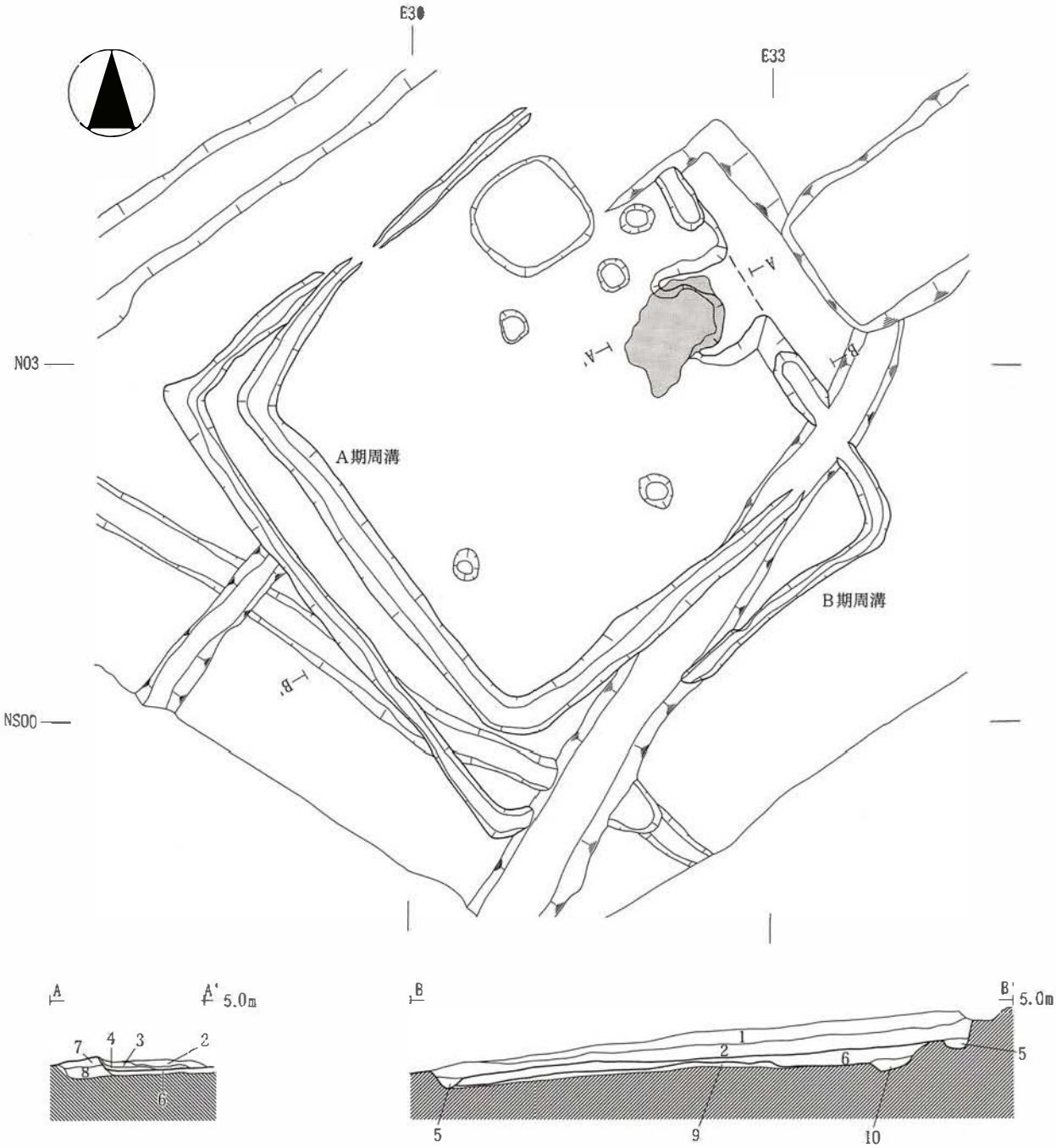
第6図　SK1461～1463土壙平面図・断面図・出土遺物

SK1462土壙

調査区の中央部からやや西側に位置している。北西側は削平のため壊されているが平面形は不整楕円形と考えられる。規模は長軸で1.5m、短軸で48cm、深さ8～12cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は1層で自然堆積と思われる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器甕が出土している。土師器杯・甕で調整がわかるものはない。

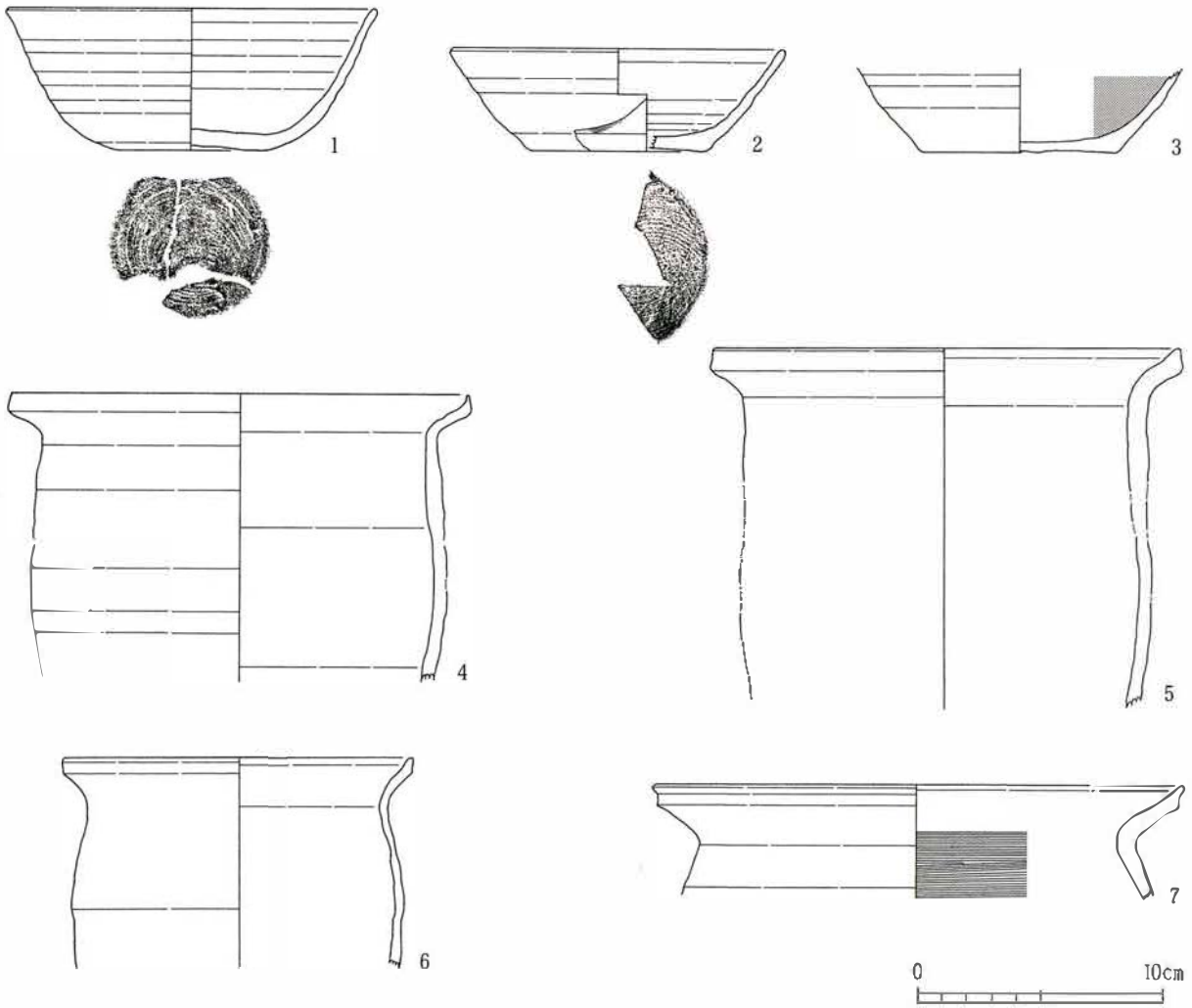
SK1463土壙

調査区の南側に位置している。一辺20cmの方形のピットと直径18cmの円形のピットとの重複関係があり、これらより新しい。平面形は不整形である。規模は南北約1.1mで、深さ48cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は1層で自然堆積と考えられる。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、須恵系土器杯が出土している。須恵器杯にはヘラ切りの後にヘラ描きが施されているものが1点、回転ヘラケズリ調整により切り離し不明のものが1点出土している。



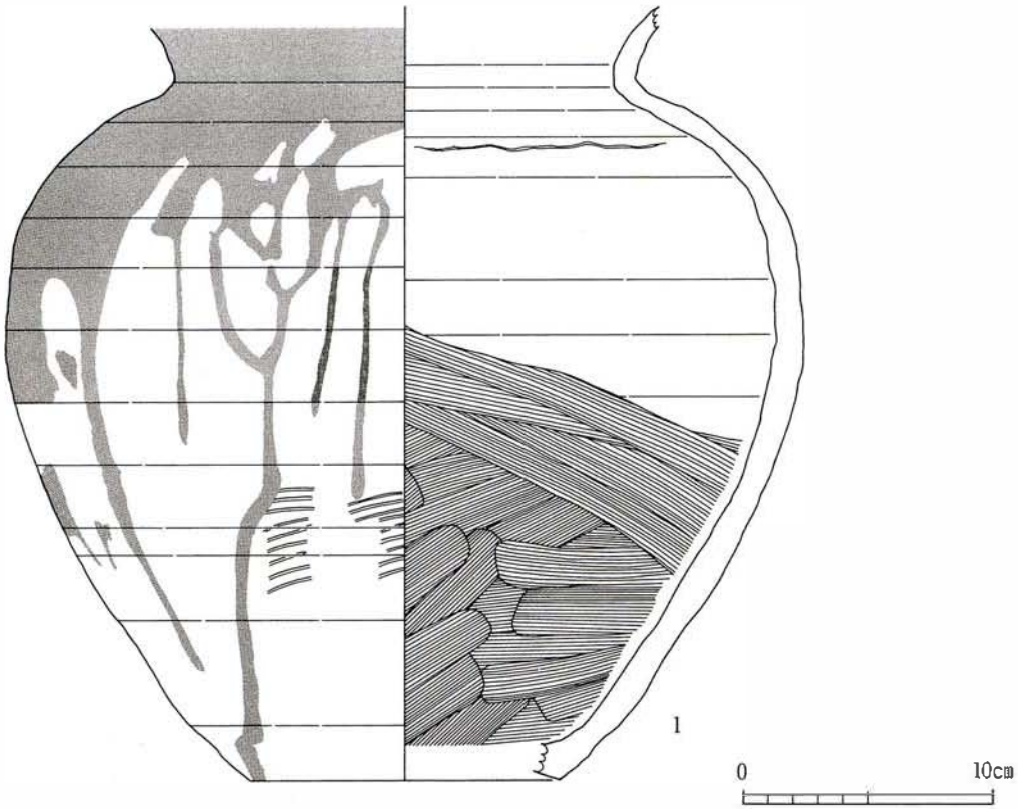
層位	土色・土性など	備考	
1	10YR4/4　褐色土	B期	1層
2	10YR4/4　褐色土　炭化物と地山粒を含む		2層
3	2.5Y4/6　赤褐色土　炭化物を含む		カマド内埋土
4	10YR3/3　暗褐色土　焼土ブロックを多く含む		カマド内埋土
5	10YR5/4　にぶい黄褐色土		周溝内埋土
6	10YR4/6　褐色土		貼床
7	5YR4/6　赤褐色粘土		カマド構築土
8	7.5YR　黒褐色粘土		カマド構築土
9	10YR5/6　黄褐色土	A期	貼床
10	10YR4/3　にぶい黄褐色土		周溝

第7図　SI1464竪穴住居跡



No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SI1464B	カマド内埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ　底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(15.2)	(6.3)	5.85		4
2	SI1464B	2層	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ・湯痕 底部：回転糸切り 【内面】ロクロナデ	(13.8)	(7.0)	4.25		10
3	SI1464B	カマド内埋土	土師器	杯	【外面】ロクロナデ　底部：回転糸切り 【内面】黒色処理	—	(7.8)	—		11
4	SI1464B	カマド内埋土	土師器	甕	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	—	—	—		8
5	SI1464B	カマド内埋土	土師器	甕	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(19.2)	—	—		13
6	SI1464B	カマド内埋土	土師器	甕	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	(14.4)	—	—		6
7	SI1464B	2層	土師器	甕	【外面】ロクロナデ 【内面】回転ハケメ	(21.6)	—	—		25

第8図　SI1464竪穴住居跡出土遺物(1)



No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SI1464B	カマド内埋土	須恵器	甕	【外面】平行タタキ→ロクロナデ 【内面】ロクロナデ→ナデ	—	(12.4)	—		5

第9図　SI1464竪穴住居跡出土遺物(2)

2区

SI1464竪穴住居跡

調査区の南側に位置している。SD1465と重複関係がありこれより古い。削平によって竪穴住居跡の北側隅が失われている。ほぼ同位置で建て替えれられており、A→Bの変遷を推定した（註）。

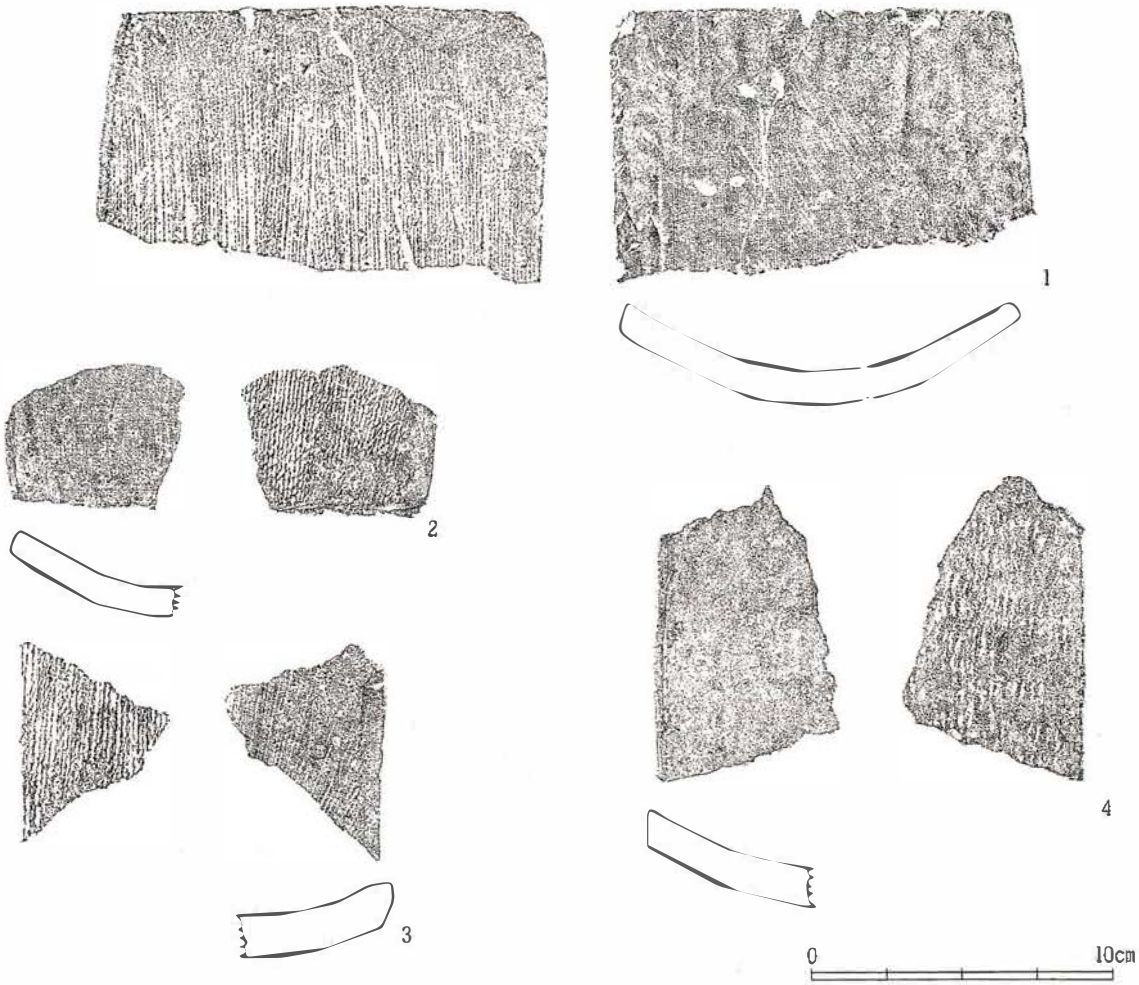
A期

平面形は方形で、規模は南東辺で3.8m、南西辺で3.6mである。方向は南東辺でE－38°51′－Nである。粘土ブロックを含む黄褐色土で床を貼っている。周溝は各辺に巡っており、幅は26～34cmである。残存壁高は8cmである。遺物は出土していない。

B期

平面形は方形で、規模は南東辺で4.2m、南西辺で4.7mである。方向は南東辺でE－37°26′－Nである。褐色土で床を貼っており、硬く締まっている。埋土は2層確認し、自然堆積と思われる。周溝は各辺に巡っており、幅は18～24cmである。残存壁高は27cmである。カマドは北東壁のほぼ中央に付設されており、側壁の一部が残存しているが煙道は完全に削平されており、残存していない。側壁は粘土を積んで構築して

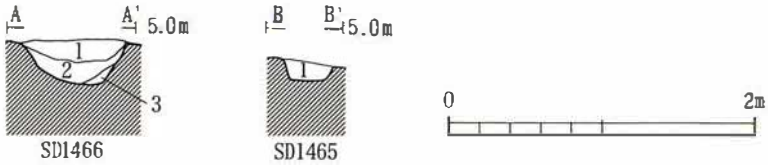
（註）B期の竪穴住居は、床面や排水溝がカマドに向かって緩やかに低くなっており、カマドの下に暗渠や竪穴住居の外に続く排水溝なども確認できなかった。このように、構造上の疑問点が残るものの、竪穴住居跡の堆積状況や重複関係からこのような変遷と構造であると結論づけた。ただし、排水施設については明らかにできなかった。



No.	遺構	層位	種別	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SI1464B	カマド側壁	平瓦 II B類－a2	【凹面】糸切痕→布目→ナデ 【凸面】縄タタキ目（つぶれ気味）	—	—	—	—	29
2	SI1464B	カマド内埋土	平瓦 II B類－a	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄タタキ目（つぶれ気味）	—	—	—	—	40
3	SI1464B	カマド内埋土	平瓦 II B類－a	【凹面】糸切痕→布目→ナデ 【凸面】縄タタキ目（つぶれ気味）	—	—	—	—	38
4	SI1464B	カマド内埋土	平瓦 II B類－b	【凹面】布目→ナデ 【凸面】縄タタキ目（つぶれ気味） 凹型台側端部の圧痕	—	—	—	—	31

第10図　SI1464竪穴住居跡 出土遺物(3)

おり、南東側の側壁には平瓦を埋めこんでいる。側壁の内面は硬く焼しまっており、赤褐色に変色している。また、床面上でピット、土壙を検出したが、主柱穴となるものは確認できなかった。検出した土壙は、カマドの北西側に位置している。平面形はほぼ方形で、規模は一辺88～93cm、深さは7～10cmである。その位置から、貯蔵穴の可能性が考えられる。遺物は、床面から土師器甕、須恵器杯、カマドから土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦（II B類、II B類－a）、砥石、土壙から土師器甕、須恵器杯・甕が出土している。土師器杯はすべてロクロ調整で回転糸切りのものである。須恵器杯は土壙からヘラ切りが1点出土しており、他はすべて回転糸切りである。



遺構	層位	土性・土色など
SD1465	1	2.5Y3／4 暗赤褐色土
SD1466	1	10YR4／4 褐色土 酸化鉄を含む
	2	10YR4／4 褐色土
	3	10YR5／6 黄褐色粘土

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SD1466	埋土	須恵器	高台付杯	【外面】ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(15.8)	9.6	4.5	2—1	37
2	SD1466	埋土	須恵器	蓋	【外面】ロクロナデ→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	19.1		2.2	2—2	9

第11図　SD1465・1466溝跡断面図・出土遺物

SD1465溝跡

調査区の南半部に位置している。SI1464、SD1466と重複関係があり、これらより新しい。東側は調査区外に延びており西側は削平によって壊されているため、確認した長さは8.6mで、深さは8～16cmである。幅は32～42cmで、方向はW－30° 57′－Nである。底面は東に向かって低くなっており、その比高差は22cmである。埋土は1層確認し、自然堆積と思われる。遺物は出土していない。

SD1466溝跡

調査区の中央部に位置している。SD1465と重複関係があり、これより古い。北東側は調査区外にのびており南西側は削平によって壊されているため、確認した長さは11.7mで、深さは17～32cmである。幅は62～77cmであり、方向はE－40° 24′－Nである。底面は北東に向かって低くなっており、その比高差は約1mである。埋土は3層確認し、いずれも自然堆積である。遺物は、須恵器蓋・高台付杯の2点が出土している。

2．第34次調査

第34次調査では、柱列跡２条、溝跡３条、土壙３基などを発見した。これらは全て地山上で発見した。また、これらの遺構から土師器、須恵器、平瓦、丸瓦が出土した。以下、調査区ごとに主な遺構と遺物について記述する。

A区

SD1510溝跡

A区の中央部に位置している。SD1511、SK1512と重複関係があり、これらより古い。北側と南側は調査区外にのびているため確認した長さは7.3mで、深さは23～58cmである。幅は1.3～1.6mであり、方向は南北発掘基準線にほぼ一致している。底面は南に向かって低くなっており、比高差は1.3mである。埋土は３層確認し、いずれも自然堆積である。なお、この溝の北側延長部分には第12次調査で発見したSD1130･1150がある。これらと今回発見したSD1510は、方向や規模、埋土の状況が極めて類似していることから同一の遺構と考えられる。その総長は46.9m、南に向かって低くなっており北端と南端の比高差は4.3m、方向はN－0°40′－Eである。遺物は、須恵器杯・甕・瓶、土師器杯・甕、平瓦（ＩＡ類、ＩＡ類－ａ、ⅡＢ類、ⅡＢ類－ａ１、ⅡＢ類－ａ２）、丸瓦（ⅡＢ類、ⅡＢ類－ａ、ⅡＢ類－ｃ）、隅切瓦（ＩＡ類、ＩＡ類－ａ）が出土している。須恵器杯はヘラ切りのもの、回転糸切りの後手持ちヘラケズリが施されているもの、手持ちヘラケズリによって切り離しが不明なものがある。

種別	器種	部位	調整	埋土	検出面	計
土師器	杯	口縁部	ロクロ調整	2		2
		底部	不明	2		2
	甕	体部	ロクロ調整	4		4
			ヘラケズリ・不明	39	2	41
		底部	不明	2		2
小計				49	2	51
須恵器	杯	口縁部		13	2	15
		体部		2		2
		底部	ヘラ切り	9		9
			手持ちヘラケズリ	2		2
			不明	1		1
	甕	口縁部		2		2
		体部		36	2	38
	瓶	口縁部		1		1
小計				66	4	70
平瓦			ＩＡ類	10	1	11
			ＩＡ類－a	2		2
			ⅡＢ類	3		3
			ⅡＢ類－ａ１	1		1
			ⅡＢ類－ａ２		1	1
			摩滅	2		2
隅切瓦			ＩＡ類	1		1
			ＩＡ類－a	1		1
小計				20	2	22
丸瓦			ⅡＢ類	10		10
			ⅡＢ類－a	1		1
			ⅡＢ類－c	1		1
小計				12		12
合計				147	8	155

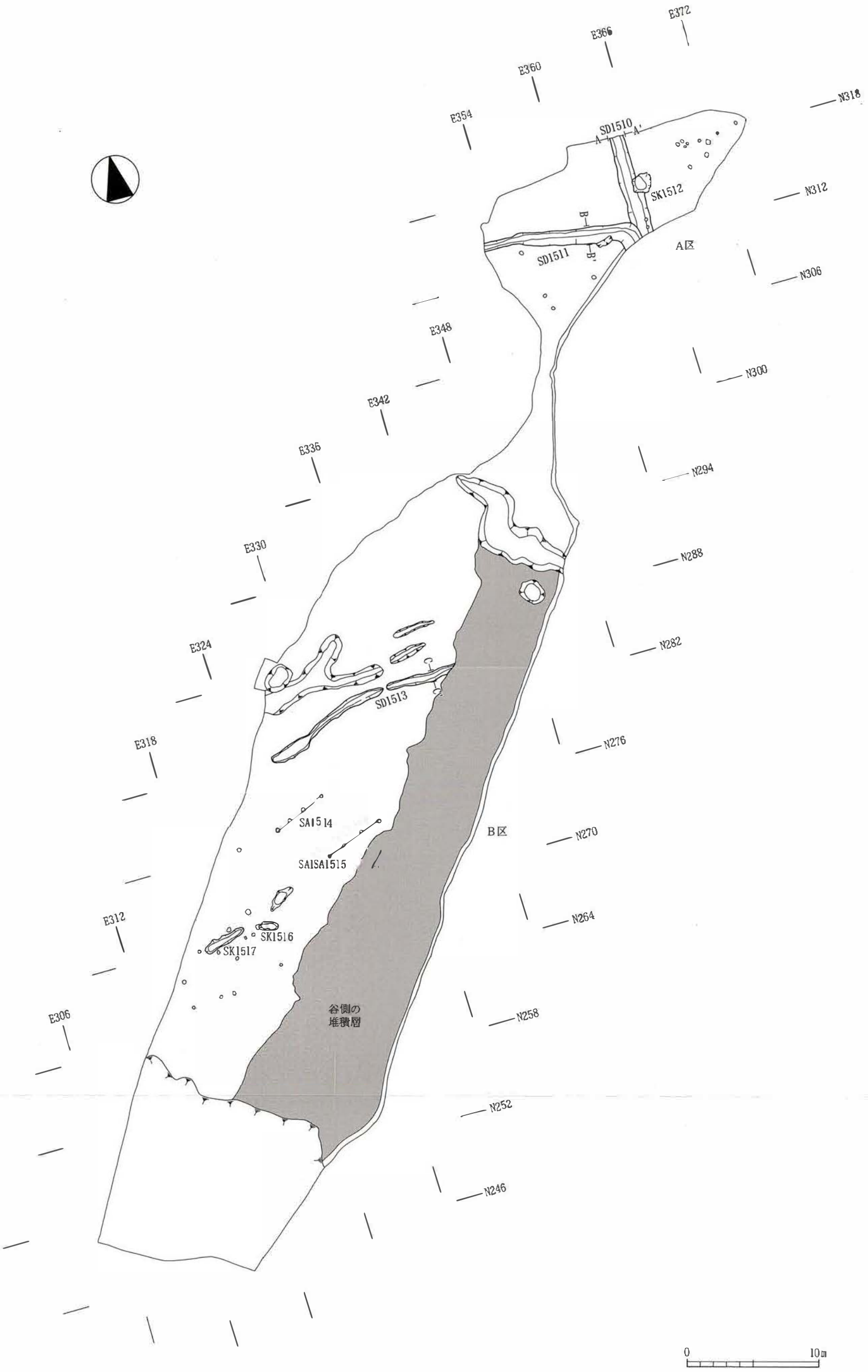
表１　SD1510溝跡出土遺物集計表

SD1511溝跡

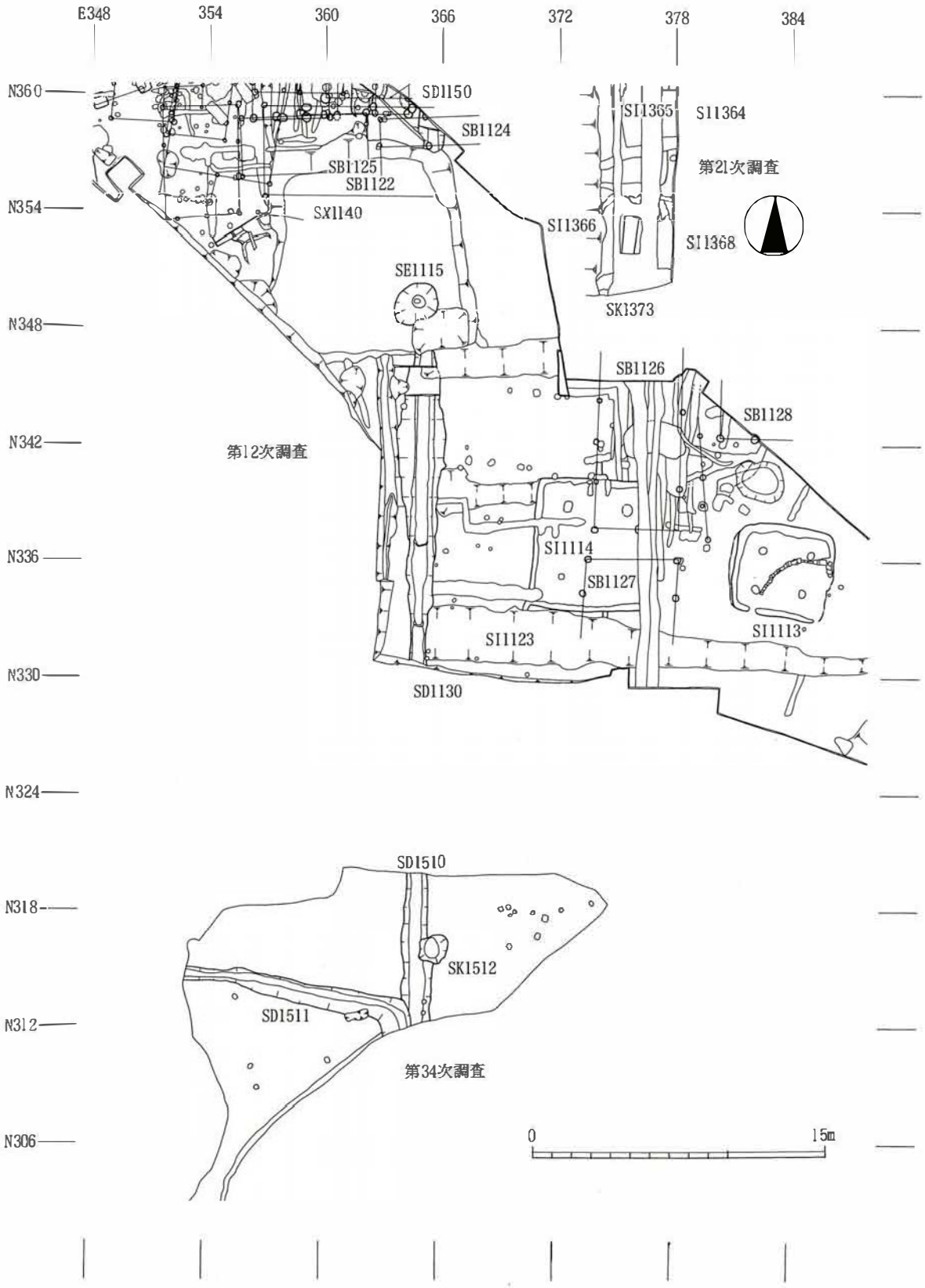
A区の西半部に位置している。SD1510と重複関係があり、これより新しい。西側と南側が調査区外にのびているため、確認した長さは10.8mである。深さは20～32cmで、幅は0.5～1.6mである。発見した部分のほとんどは東西方向であるがSD1510と重複する地点から南に曲がっている。方向は東西方向でE－10°37′－S、南北方向でE－35°24′－Sである。底面は東に向かって低くなっており、南端部分が最も低くなっている。その比高差は12cmである。遺物は、須恵器杯・甕、土師器甕、平瓦（ＩＡ類、ⅡＢ類－ａ２）、丸瓦（ⅡＢ類－ａ）が出土している。須恵器杯はヘラ切りのものである。

SK1512土壙

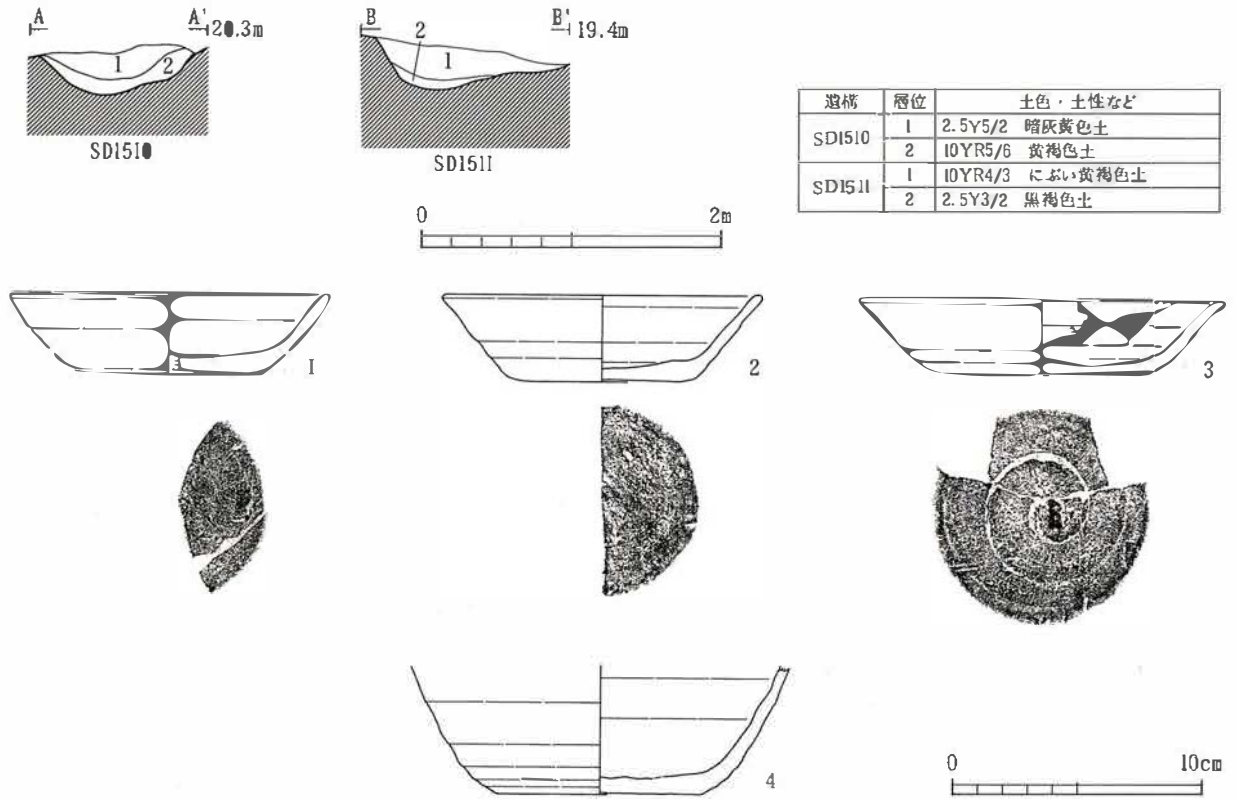
A区の中央部に位置している。SD1510と重複関係があり、これより新しい。平面形はほぼ円形である。規模は、直径約1.4mで、深さは28cmである。壁は、緩やかに立ちあがっている。埋土は礫を多量に含む粘質土を１層確認した。遺物は、須恵器杯・甕、土師器甕が出土している。須恵器杯で底部の調整がわかるものはない。



第12図　第34次調査遺構全体図



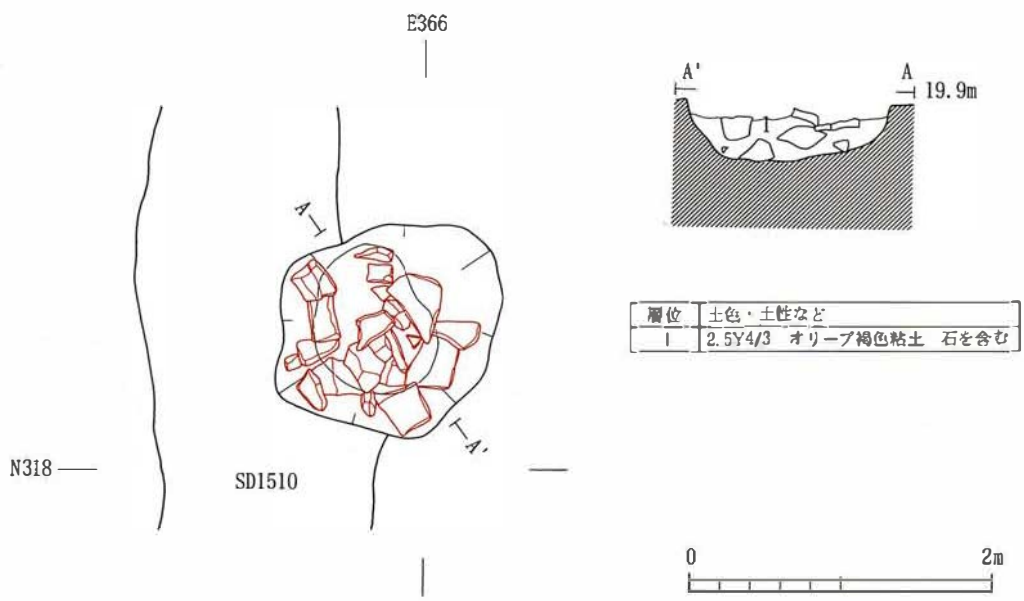
第13図　SD1510・SD1511溝跡・SK1512土壙溝跡



遺構	層位	土色・土性など
SD1510	1	2.5Y5/2　暗灰黄色土
	2	10YR5/6　黄褐色土
SD1511	1	10YR4/3　にぶい黄褐色土
	2	2.5Y3/2　黒褐色土

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SD1510	埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ　底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.8)	(7.4)	3.25		23
2	SD1510	埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ　底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ	(12.6)	(6.4)	3.45		24
3	SD1510	埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ　底部：ヘラ切り 【内面】ロクロナデ・油煙付着	(14.6)	8.0	3.15		25
4	SD1510	埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ　底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	—	(8.2)	—		21

第14図　SD1510・1511溝跡　断面図・SD1510溝跡出土遺物



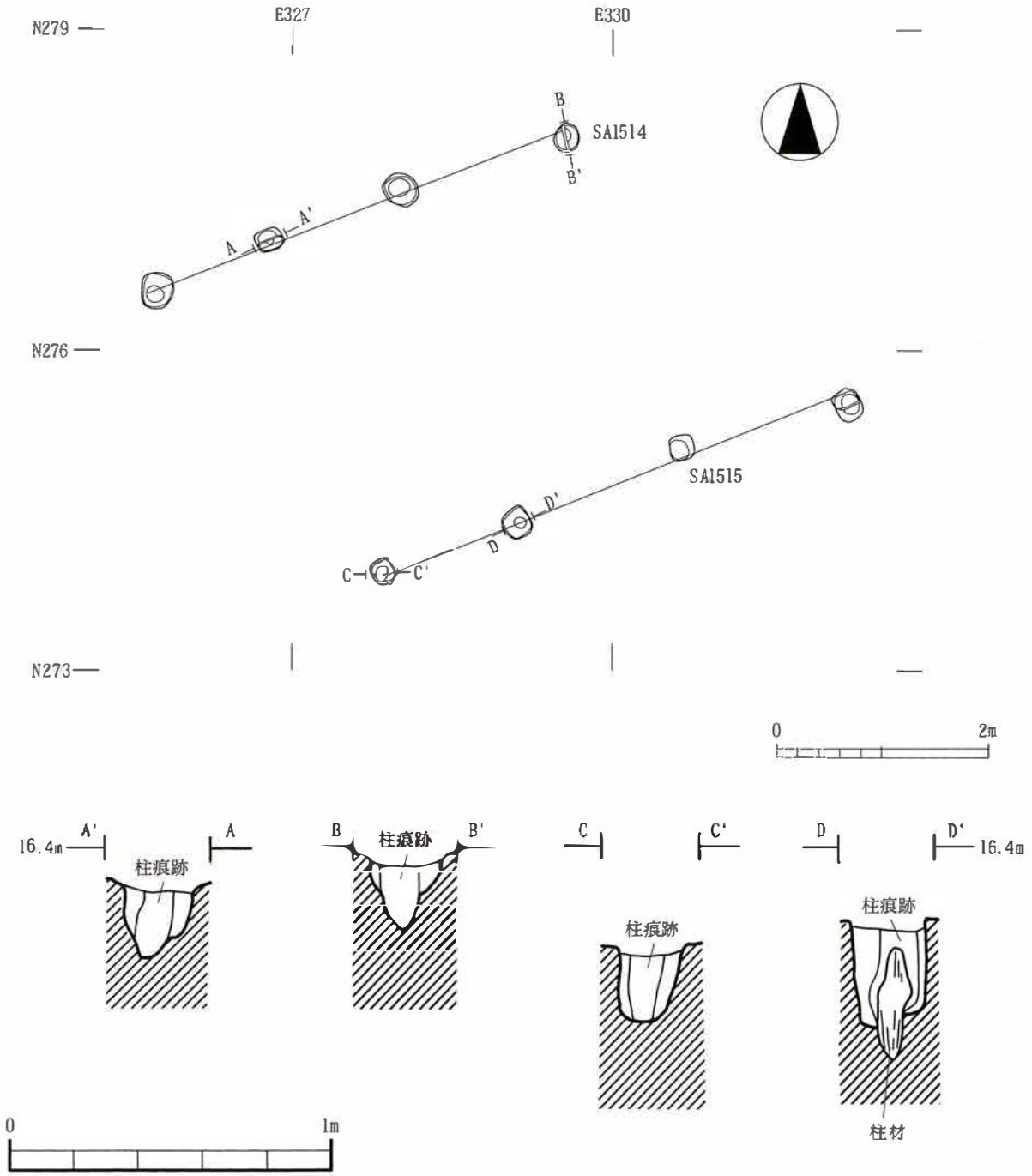
層位	土色・土性など
1	2.5Y4/3　オリーブ褐色粘土　石を含む

第15図　SK1512土壙

B区

SA1514柱列跡

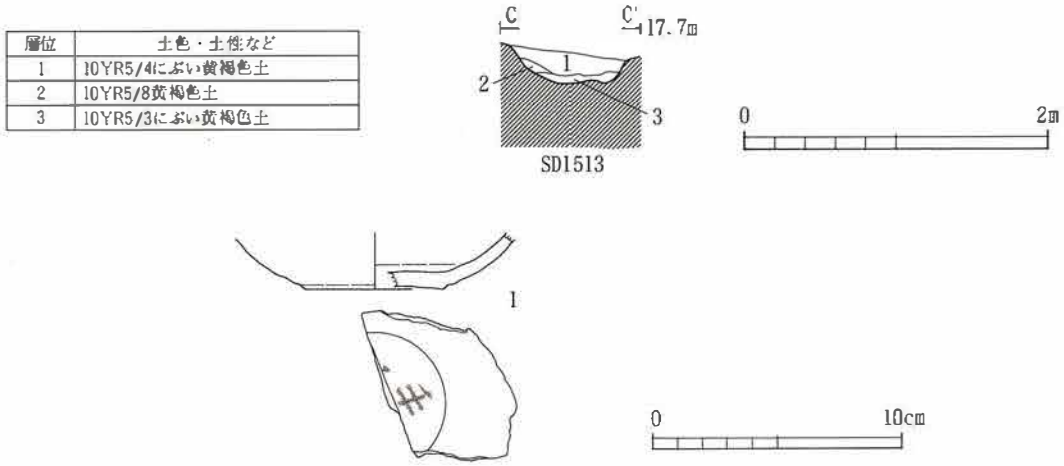
B区中央部に位置している東西方向の柱列である。発見した４つの柱穴全てにおいて柱痕跡を検出した。方向はW—22° 23′—Sである。総長は4.16mで、柱間は西より1.20m、1.32m、1.64mである。柱穴の平面形はおよそ円形であり、規模は径20～28cmである。柱痕跡は径９～12cmである。遺物は出土していない。



第16図　SA1514・1515柱列跡

SA1515柱列跡

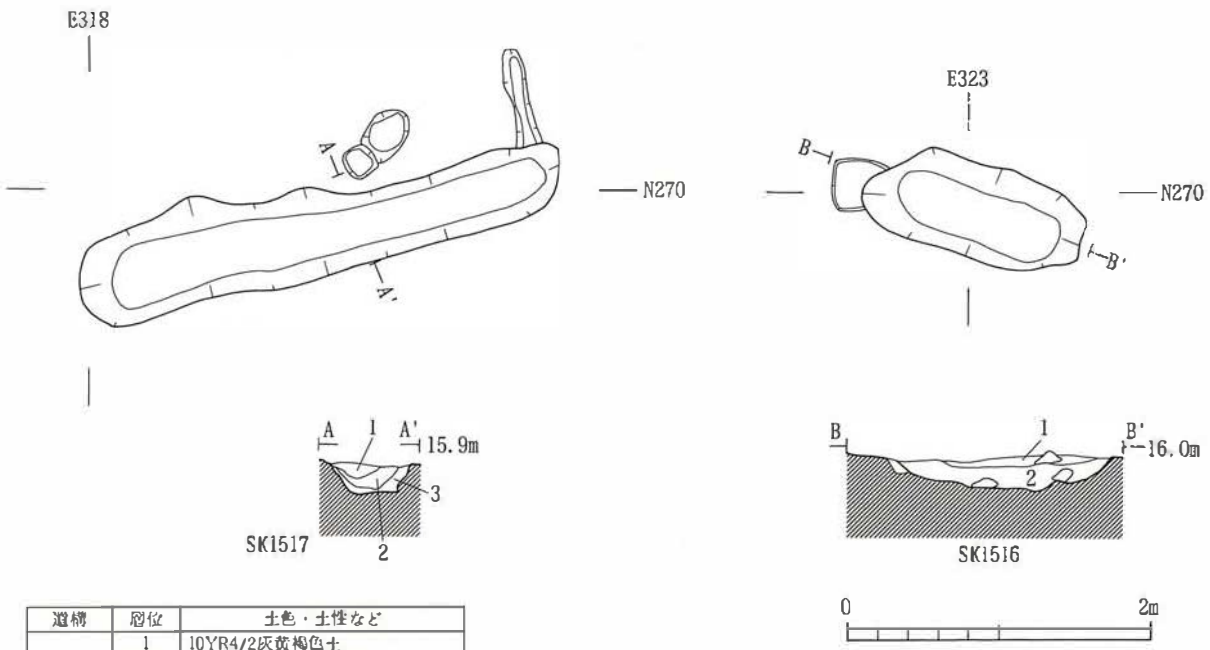
B区中央部に位置している東西方向の柱列である。東から２つ目の柱穴以外で柱痕跡を検出した。方向はW—24° 14′—Sである。総長は4.69mで、柱間は西より1.14m、約1.7m、約1.6mである。柱穴の平面形はおよそ円形であり、規模は径18〜22cmである。柱痕跡は径11〜13cmである。遺物は出土していない。



層位	土色・土性など
1	10YR5/4にぶい黄褐色土
2	10YR5/8黄褐色土
3	10YR5/3にぶい黄褐色土

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	SD1513	埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：回転糸切り・墨書「口」 【内面】ロクロナデ	—	(5.6)	—		80

第17図　SD1513溝跡断面図・出土遺物



遺構	層位	土色・土性など
SK1517	1	10YR4/2灰黄褐色土
	2	10YR4/2灰黄褐色土
	3	10YR4/6褐色土
SK1516	1	10YR3/4暗褐色粘土 石を含む
	2	10YR4/1褐灰色粘土 石を含む

第18図　SK1516・1517土壙

SD1513溝跡

B区中央部に位置している。削平されているため、中央部分で途切れている。確認した長さは15.6mである。方向は、東半ではE－2°54′－Nで、西半はやや南に向きを変えE－16°26′－Nである。底面は西に向かって低くなっており、その比高差は74cmである。遺物は、土師器杯・甕、須恵器杯・甕、平瓦（ⅠA類）が出土している。土師器杯は底部に回転ヘラケズリが施されたものであり、須恵器杯はヘラ切りのもの、回転糸切りのものが出土している。

SK1516土壙

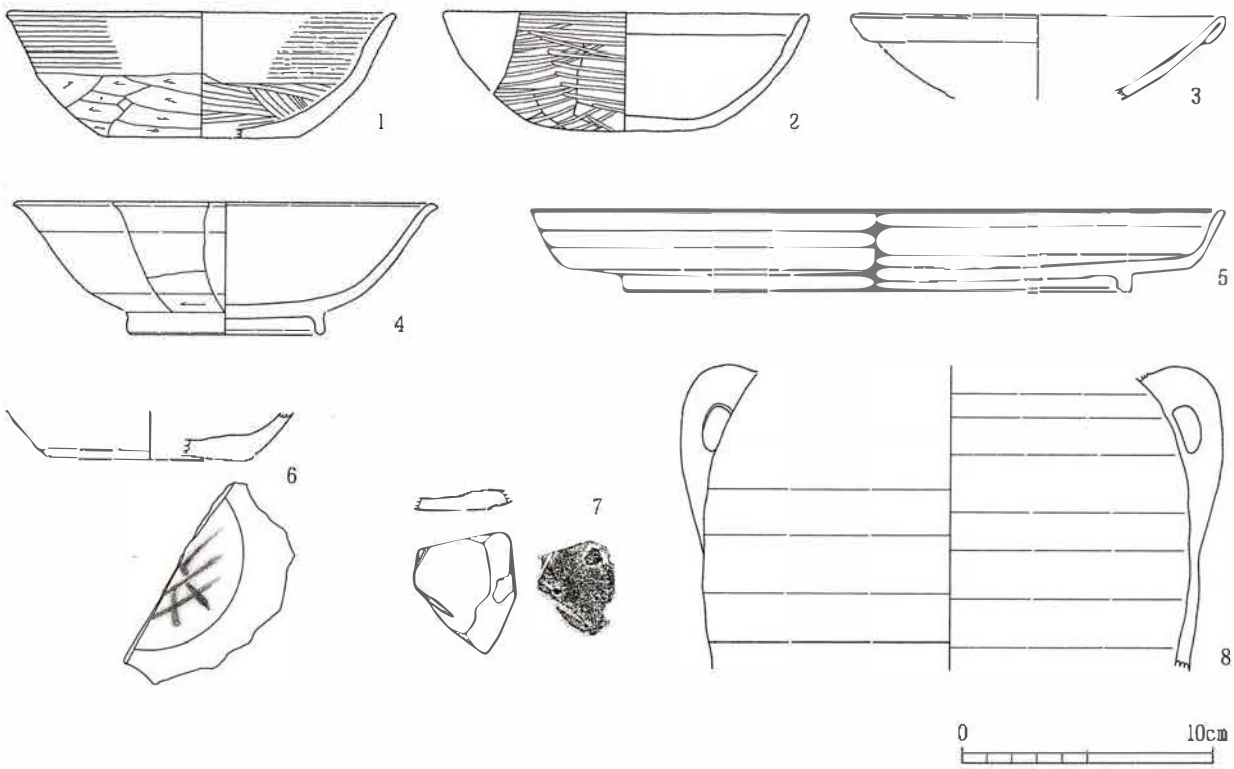
B区南半部に位置している。平面形は不整楕円形である。規模は長軸1.5m、短軸0.6mで、深さは13～23cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は礫を含む2層を確認した。遺物は須恵器杯・甕、土師器甕が出土している。須恵器杯は底部に回転ヘラケズリを施されたものである。また、漆紙が付着した須恵器杯が出土している。漆紙に文字等は確認できなかった。

SK1517土壙

B区南半部に位置している。平面形は不整楕円形である。規模は長軸3.3m、短軸45～70cmで、深さは10cmである。壁は緩やかに立ち上がっている。埋土は3層確認し、いずれも自然堆積である。遺物は出土していない。

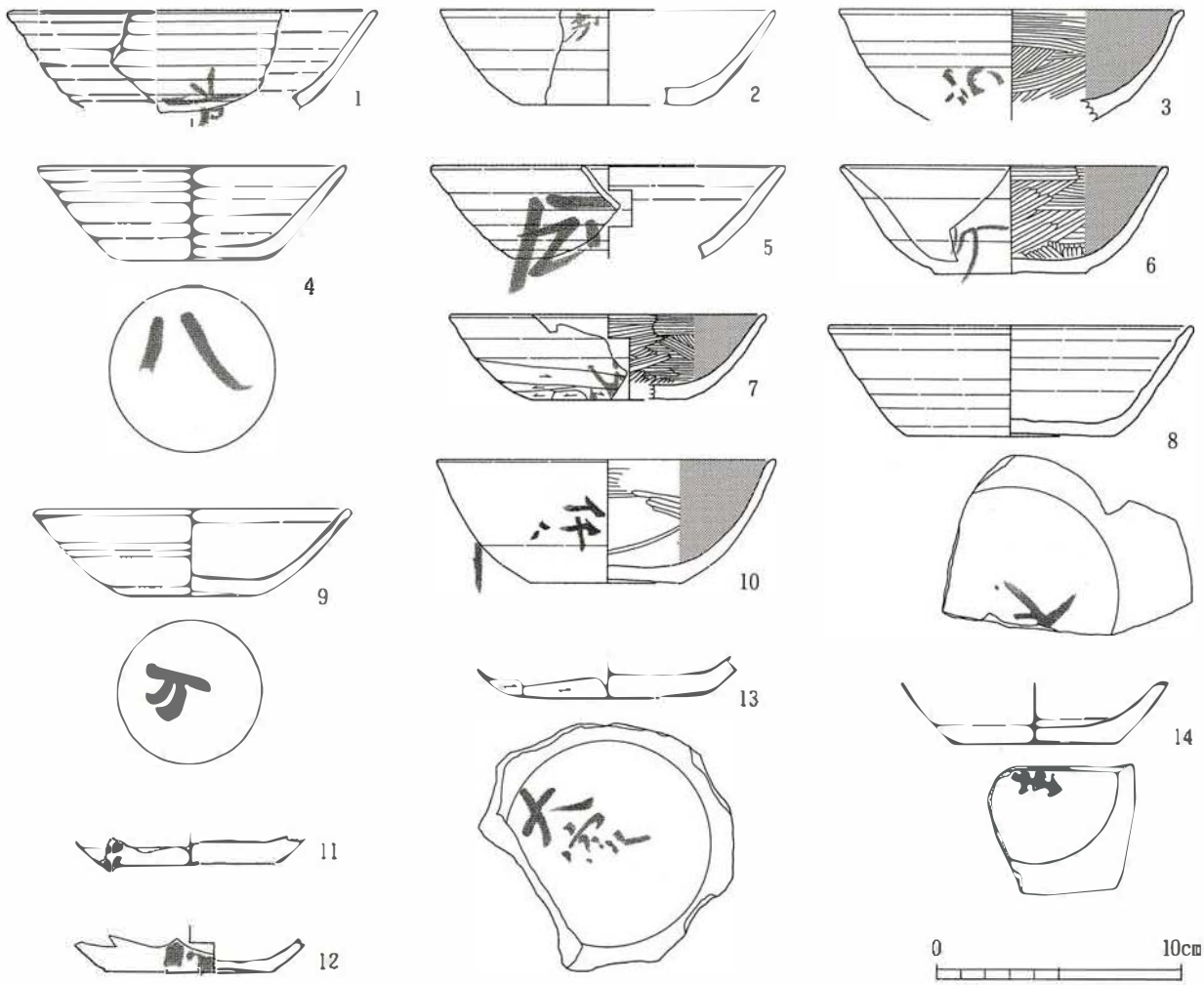
その他の出土遺物

表土など遺構外より土師器、須恵器、須恵系土器、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、白磁、灰釉陶器、中世の青磁、近世以降の陶磁器などが出土した。特に第34次調査のB区東側の堆積層から、多量の墨書土器が出土したことが注目される。また、畿内系土器、関東系土器、須恵器横瓶、漆付着土器なども出土している。



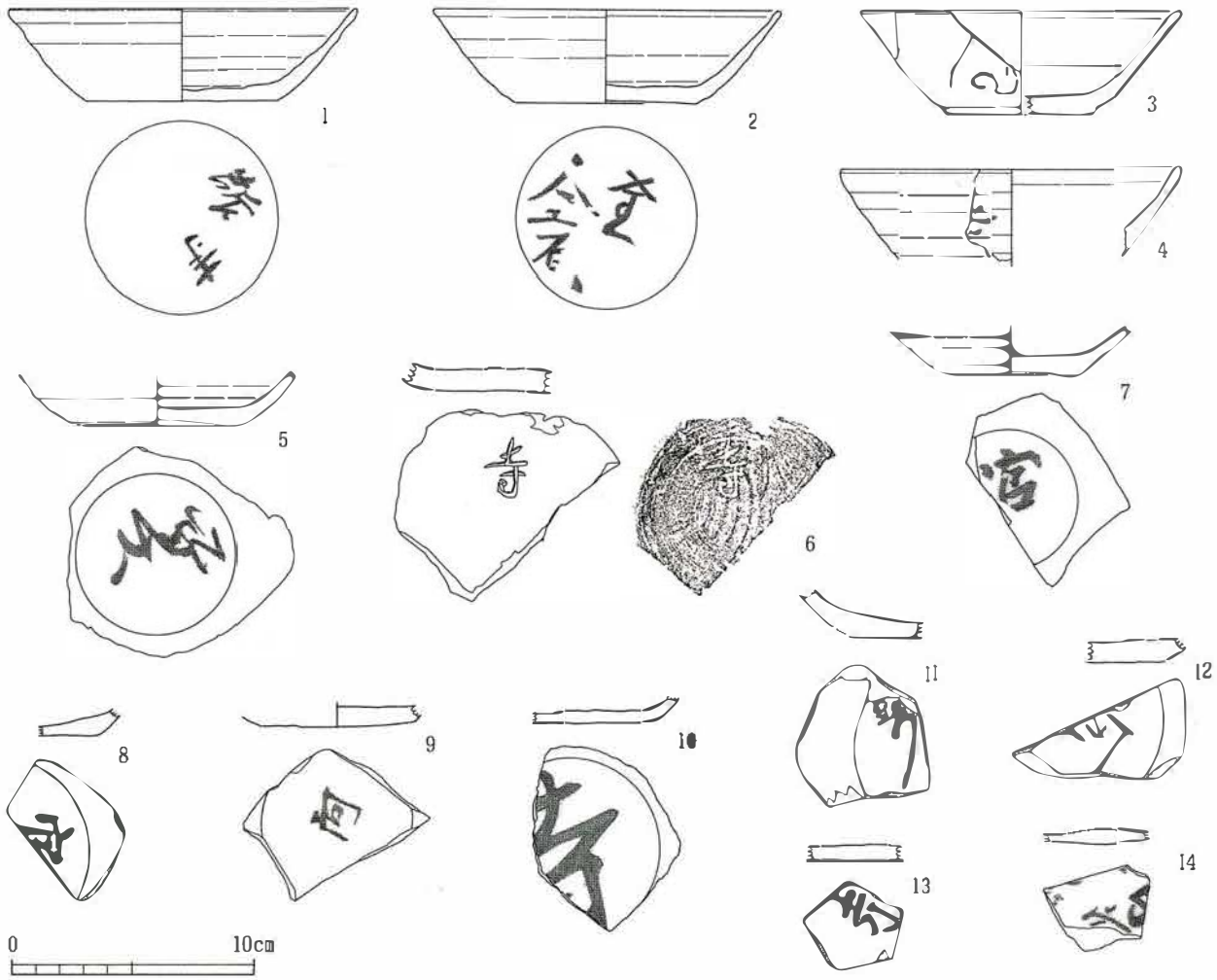
No.	次数	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	図版番号	登録番号
1	34 B区	L—I	土師器 関東系土器	杯	【外面】手持ちヘラケズリ→ナデ 底部：手持ちヘラケズリ 【内面】ナデ	(15.2)	(8.0)	5.0	2—7	176
2	34 B区	L—I	土師器 畿内系土器	杯	【外面】手持ちヘラケズリ→ミガキ 【内面】ナデ	(14.6)	5.4	4.7	2—6	177
3	30 No.1	灰白色火山灰上面	白磁	椀	【外面】玉縁口縁	(14.9)	—	—	2—5	1
4	34 B区	L—I	灰釉陶器	椀	【外面】ロクロナデ→施釉 底部：高台貼付→回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ→施釉	(17.0)	(7.6)	5.3		157
5	34 B区	L—I	須恵器	盤	【外面】ロクロナデ 底部：回転ヘラケズリ 【内面】ロクロナデ	(27.4)	(20.2)	3.3		175
6	30 No.1	小溝埋土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り・墨書「口」 【内面】ロクロナデ		(8.2)			48
7	30 No.1	表土	須恵器	杯	【外面】ロクロナデ 底部：ヘラ切り→ヘラ描き 【内面】ロクロナデ	—	—	—		18
8	34 B区	L—I	須恵器	双耳瓶	【外面】ロクロナデ 【内面】ロクロナデ	—	—	—	—	34

第19図　遺構外出土遺物(1)



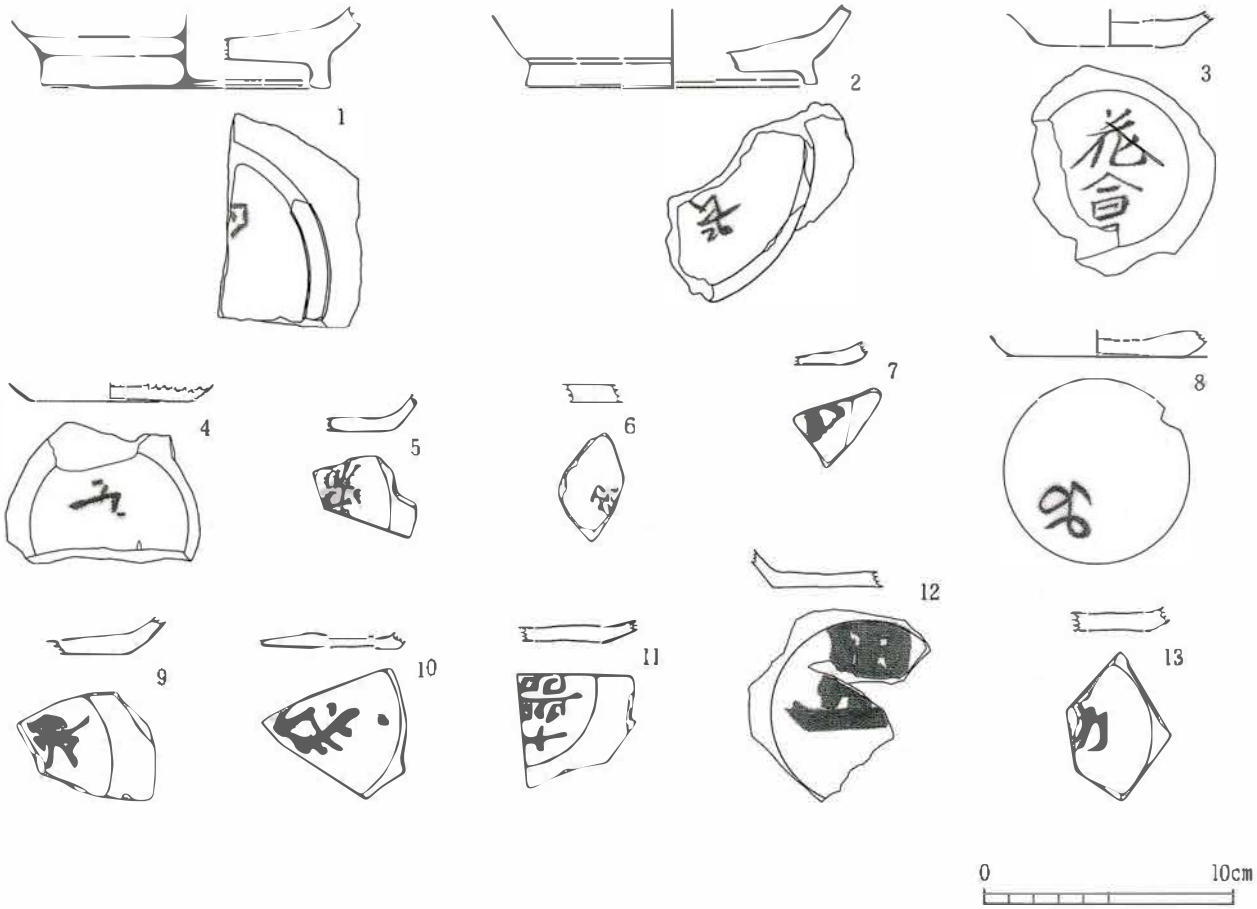
No.	次数	遺構・層位	種別	器種	特徴	釈文	記載部位	記載方向	図版番号	登録番号
1	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯		「日下」	体部外面	倒位	3－1	89
2	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：不明	「□」	体部外面	正位カ		100
3	34	B区・L－1	土師器（墨書土器）	杯		「家」	体部外面	横位		60
4	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「八」	底部外面	－		137
5	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯		「朔」	体部外面	正位	3－2	98
6	34	B区・L－1	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「家」	体部外面	正位		142
7	34	B区・L－1	土師器（墨書土器）	杯	底部：手持ちヘラケズリ	「□」	体部外面	不明		56
8	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：手持ちヘラケズリ	「下」	底部外面	－		59
9	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「万」	底部外面	－	3－3	178
10	34	B区・L－1	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「仟□」・「□」	体部外面	横位	3－4	4
11	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：手持ちヘラケズリ	「□」	体部外面	不明		58
12	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「□」	体部外面	不明		92
13	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：手持ちヘラケズリ	「大家」	底部外面	－		54
14	34	B区・L－1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「□」	底部外面	－		87

第20図　遺構外出土遺物(2)



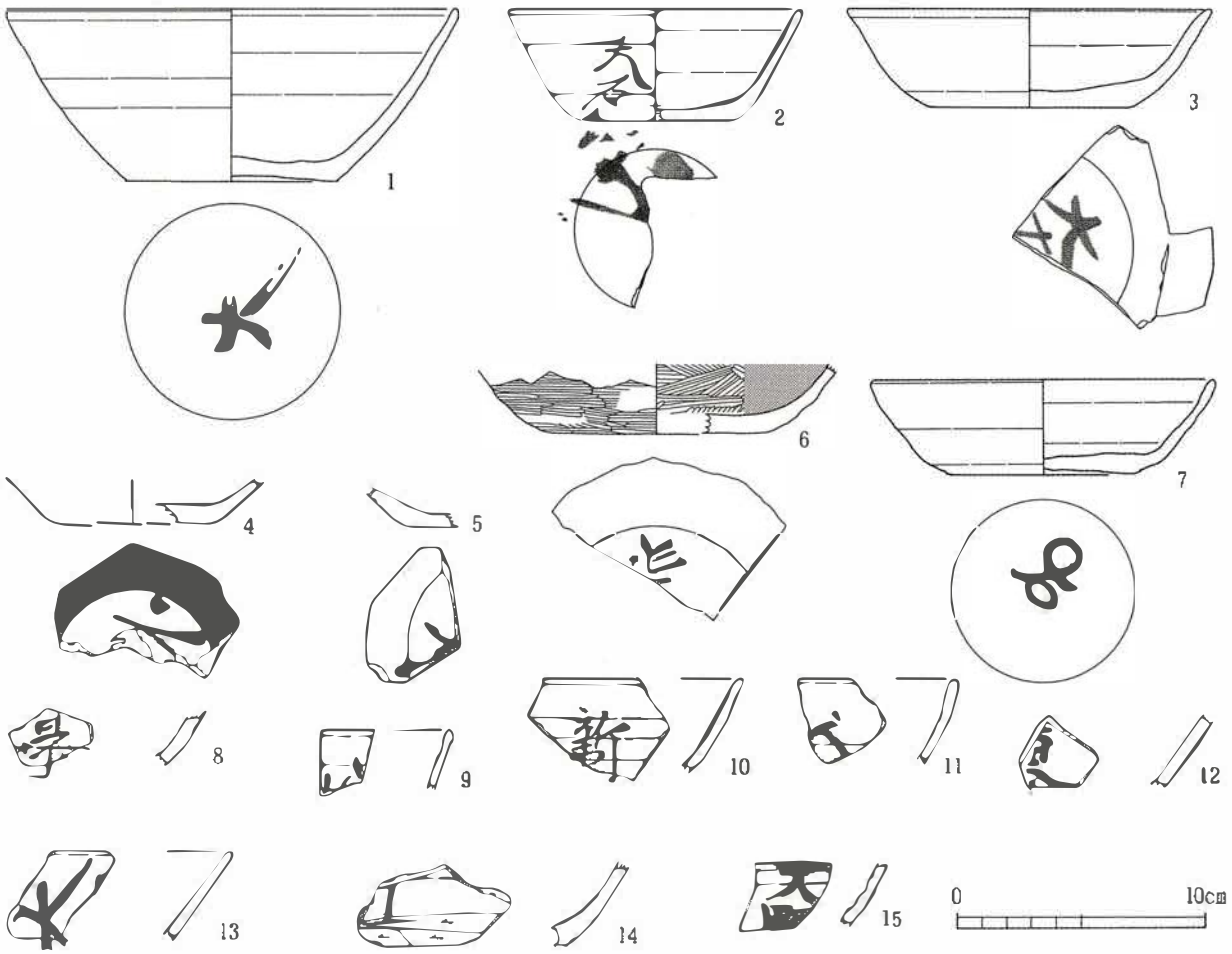
No.	次数	遺構・層位	種別	器種	特徴	釈文	記載部位	記載方向	図版番号	登録番号
1	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「寺館」	底部外面	—	3—5	136
2	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「□」・「金原」カ	底部外面	—		133
3	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「凡」	体部外面	正位		139
4	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯		「小」カ	体部外面	横位		67
5	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「笑」	底部外面	—	3—6	138
6	34	B区・検出面	須恵器（刻書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ ヘラ描き	「寺」	底部外面	—	3—7	182
7	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「官」	底部外面	—	3—8	84
8	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯	底部：手持ちヘラケズリ	「官」	底部外面	—		66
9	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「阿」	底部外面	—	3—9	180
10	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：不明	「寺」	底部外面	—	3—10	95
11	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯	底部：手持ちヘラケズリ	「料」カ	底部外面	—		64
12	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「厨」カ	底部外面	—		90
13	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ	「十万」	底部外面	—	3—11	70
14	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ	「□□」・「□□」	底部外面	--		73

第21図　遺構外出土遺物(3)



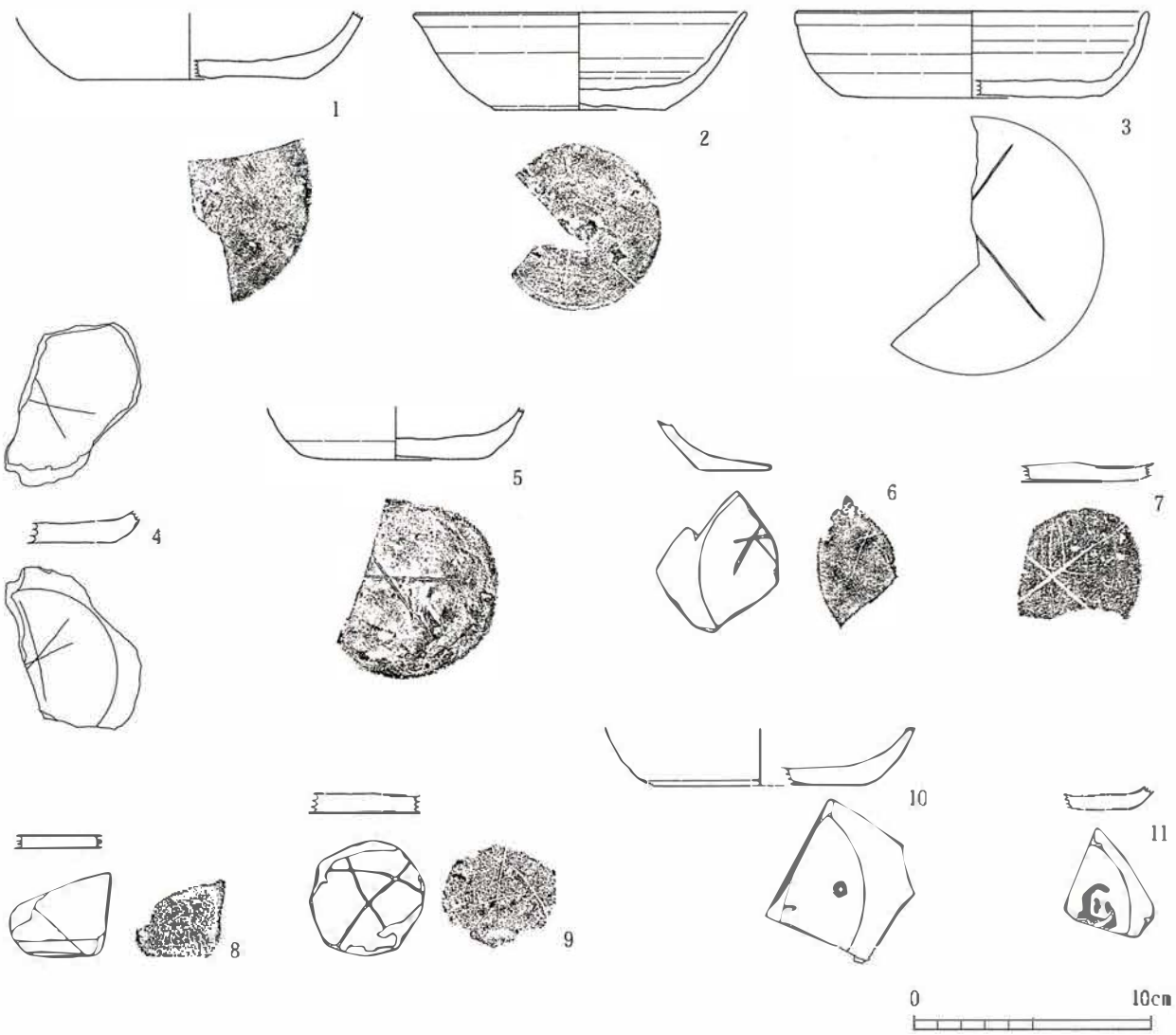
No.	次数	遺構・層位	種別	器種	特徴	釈文	記載部位	記載方向	図版番号	登録番号
1	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	高台付杯	底部：ロクロナデ 高台貼付	「□」	底部外面	—		106
2	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	高台付杯	底部：回転ヘラケズリ 高台貼付	「長□」	底部外面	—	3—12	179
3	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「花會」	底部外面	—	3—13	140
4	34	B区・L—I	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「□」	底部外面	—		65
5	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「家」カ	底部外面	—		113
6	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ	「正」	底部外面	—		111
7	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「□」	底部外面	—		115
8	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「あ」	底部外面	—	3—19	55
9	34	B区・L—I	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ	「本」カ	底部外面	—		63
10	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「□」	体部外面	—		99
11	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「十器」	底部外面	—	3—14	85
12	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「里」	底部外面	—	3—15	91
13	34	B区・L—I	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「□」	体部外面	—		94

第22図　遺構外出土遺物(4)



№	次数	遺構・層位	種別	器種	特徴	釈文	記載部位	記載方向	図版番号	登録番号
1	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り	「大」	底部外面	—	3—16	143
2	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：回転糸切り・墨痕	「大石」	底部外面	—	3—17	134
3	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「大□」	底部外面	—	3—18	96
4	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「□」	底部外面	—		93
5	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ	「□」	底部外面	—		61
6	34	B区・カクラン	土師器（墨書土器）	杯	非ロクロ	「□」	底部外面	—		62
7	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「ꝏ」	底部外面	—	3—19	135
8	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯		「酒坏□」	体部外面	正位	3—20	76
9	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯		「□」	体部外面	不明		114
10	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯		「新」	体部外面	正位	3—21	181
11	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯		「□」	体部外面	正位か		77
12	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯		「□」	体部外面	正位か		75
13	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯		「大□」	体部外面	横位		88
14	34	B区・L—1	土師器（墨書土器）	杯	底部：回転ヘラケズリ	「□」	体部外面	正位か		74
15	34	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯		「大□」	体部外面	正位		83

第23図　遺構外出土遺物(5)



No.	次数	遺構・層位	種別	器種	特徴	釈文	記載部位	配置方向	図版番号	登録番号
1	34	B区・L—1	須恵器	杯	底部：ヘラ切り・ヘラ描き		底部外面	—		120
2	34	B区・L—1	須恵器	杯	底部：ヘラ切り・ヘラ描き		底部外面	—		117
3	34	B区・L—1	須恵器	杯	底部：回転糸切り→回転ヘラケズリ ヘラ描き		底部外面	—		116
4	34	B区・L—1	須恵器	杯	【外面】ヘラ描き底部：回転糸切り 【内面】ヘラ描き		底部内面 底部外面	—		121
5	34	B区・L—1	土師器	杯	底部：ヘラ切り・ヘラ描き		底部外面	—		119
6	34	B区・L—1	土師器	杯	底部：手持ちヘラケズリ・ヘラ描き	「大」	底部外面	—		124
7	34	B区・L—1	土師器	杯	底部：磨滅・ヘラ描き		底部外面	—		122
8	34	B区・L—1	土師器	杯	底部：回転ヘラケズリ・ヘラ描き		底部外面	—		125
9	29	3T・L—II	土師器	甕	底部：ヘラ描き		体部外面	—		2
10	35	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「○」	底部外面	—		3
11	35	B区・L—1	須恵器（墨書土器）	杯	底部：ヘラ切り	「□」	底部外面	—		2

第24図　遺構外出土遺物(6)

V考　　察

今回の調査で発見した遺構は、竪穴住居跡1棟、柱列跡2条、溝跡5条、井戸跡1基、土壙6基などである。以下、主な遺構の年代を検討し、最後にそれらの性格についてまとめてみる。

(1)竪穴住居跡の年代

SI1464は、A期→B期の2時期の変遷があり、またSD1465と重複関係がある。しかし、A期とSD1465に伴う遺物が出土していないため、B期の出土遺物によって年代を考える。B期の竪穴住居に伴う遺物としてカマド、周溝、貯蔵穴からロクロ調整の土師器杯・甕、須恵器杯、平瓦（ⅡB類－a・b）が出土している。ロクロ調整の土師器杯・甕は、白鳥良一氏による多賀城跡出土土器の分類で8世紀末頃としたB群土器以降に見られるものである。また平瓦ⅡB－b類は政庁第Ⅲ期に伴うことから年代は寶亀11（780）年を上限とすることができる。土師器杯の底部はすべて回転糸切り無調整であり、須恵器杯の底部はヘラ切りのものが1点、回転糸切り無調整のものが2点出土している。須恵系土器は堆積層からも全く出土していない。土師器、須恵器ともに回転糸切り無調整が多く須恵器にはヘラ切りも含むことや、須恵系土器を含まないことから、9世紀中葉の年代が考えられている多賀城跡第62次調査第Ⅱ群土器のあり方に類似している。よってB期は9世紀中葉頃と考えられる。また、A期については9世紀中葉以前でも大きくは遡らない年代を想定しておきたい。

(2)溝跡の年代

SD1466からは、須恵器高台付杯・蓋が出土しているだけである。高台付杯は、口径が15.8cmと中型品で杯部が浅く皿状になっており、底部には回転ヘラケズリが施されている。同じような特徴を持つものは、市川橋遺跡第25次調査SD949や山王遺跡町地区SK2764から出土した遺物に含まれており、それぞれ8世紀末～9世紀前葉、8世紀後半と考えられている。したがって、SD1466はおよそ8世紀後半以降と考えておく。

SD1510は、第12次調査において発見したSD1130・1150と同一の溝跡と考えたものである（註1）。それによるとSD1130では出土遺物は上層と下層から出土しており、上層の出土遺物は、①土師器杯は回転ヘラケズリと手持ちヘラケズリされたものがある。②土師器甕もロクロ調整されたものが多い。③須恵器杯は静止糸切りと回転糸切り、ヘラ切り、切り離し後手持ちヘラケズリのものがある。④高台付杯は底部が糸切りのものとヘラ切りものがあるなどの特徴がある。一方、下層の遺物は、①土師器甕はロクロ調整のものと非ロクロでハケメの見られるものがある。②須恵器杯はすべてヘラ切りであるなどの点が指摘できる。上層は多賀城跡第60次調査SE2101B第Ⅲ層出土土器群に類似し、下層は第62次調査第Ⅰ群土器に類似していることから、上層土器群を「おおよそ9世紀前半頃」、下層土器群の年代から「溝の開削時期について8世紀末頃まで遡る可能性もある」と考えている。今回調査を行ったSD1510出土遺物も、ヘラ切りの須恵器杯が主体を占めることなどその内容がほぼ一致している。また、平瓦についてみても政庁第Ⅲ・Ⅳ期のものは含まれていない。このことから、今回の調査でも過去の調査結果とほぼ同じ年代と考えられる。

SD1511はSD1510と重複関係があり、これより新しい。よって、年代の上限は9世紀前半である。ヘラ切りの須恵器杯と平瓦（ⅡB類－a2）が出土しているが、年代の下限については明らかでないため9世紀前半以降と考えておく。

(3)近世の遺構の年代

SE1460からは、大堀相馬産と考えられる陶器土瓶・蓋が出土している。蓋は最下層から、土瓶はその上層から出土している。その特徴から蓋は19世紀前半、土瓶は19世紀中頃のものであることから、おおよそ19世紀と考えられる。

(4)多賀城廃寺跡との関わりについて

最後に今回の調査で発見した遺構、遺物と多賀城廃寺跡との関わりについて簡単にふれておきたい。

第34次調査B区東側の堆積層から出土した墨書土器や刻書土器の中には「寺」「寺館」など寺院との関わりを窺わせるものや「花會」のように仏教行事を記したものがあり注目される。「寺」「寺司」(註2)や「花會」(註3)は廃寺跡の調査の際にも出土している。また、焼成前に「寺」と刻書された須恵器杯は、廃寺跡に供給されたものと考える。次に、B区から出土した瓦のうち、年代を推定できる平瓦についてみると、政庁第Ⅰ期に伴うものが約7割と主体を占めている。多賀城廃寺跡から出土した軒丸・軒平瓦の構成においても第1期の瓦が主体を占めるという指摘があり、「多賀城廃寺は多賀城政庁第Ⅱ・Ⅲ期にはあまり修復されず、主要建物には政庁第1期の瓦が葺かれていたが、貞観11(869)年の陸奥国大地震で被害を受け政庁第Ⅳ期に修復された」と考えられている(註4)。今回の調査区から出土した瓦の時期別の構成比率もおおよそ寺跡から出土したものと同様の傾向がうかがわれたことを指摘しておきたい。

また、A区で発見したSD1510については第12次調査のSD1130・1150と一連の遺構である。多賀城廃寺跡から東に約200m離れた位置にあり、長さ46.9m以上延びていることを確認した。方向は丘陵の傾斜に左右されることなく真北方向を保っていることが注目される。性格については、何らかの区画溝の可能性が考えられよう。

Ⅵまとめ

(1)多賀城廃寺跡南東側の隣接地を調査し、9世紀中葉頃の竪穴住居跡1棟、9世紀前半頃の南北の溝跡、近世の井戸跡1基などを発見した。

(2)第34次調査B区において出土した墨書土器や刻書土器は多賀城廃寺跡との関わりが窺われるものがある。

(註1)多賀城市教育委員会『小沢原遺跡・高崎遺跡ー史跡連絡線関連遺跡発掘調査報告書ー』多賀城市文化財調査報告書第54集 1999

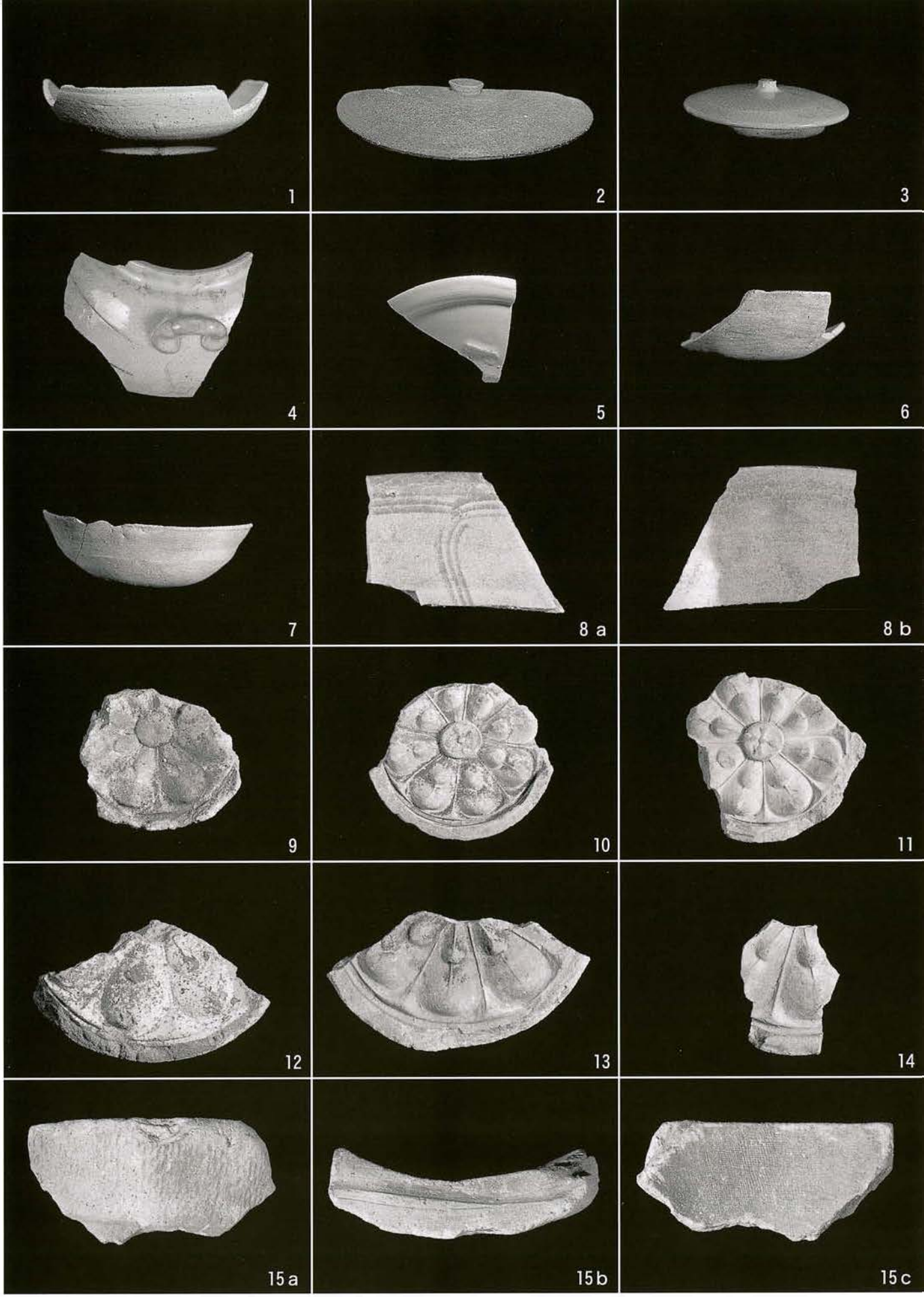
(註2)宮城県教育委員会『多賀城跡調査報告書1 ー多賀城廃寺跡ー』 1970

(註3)多賀城市『多賀城市史 第4巻 考古資料』 1991

(註4)柳沢和明「宮城県」『第3回 東日本埋蔵文化財研究会 古代官衙の終末をめぐる諸問題 ー第1分冊 問題提起・各地方の概要ー』東日本埋蔵文化財研究会 1994

左上：第30次調査　１区全景（北東から）
左中：第30次調査　SI1464B（北東から）
左下：第34次調査　Ａ区全景（南から）

右上：第30次調査　SI1464B（南西から）
右中：第30次調査　SI1464Bカマド（南西から）
右下：第34次調査　Ｂ区全景（北から）



1. 須恵器高台付杯（SD1466　第11図1）　2. 須恵器蓋（SD1466　第11図2）　3. 陶器蓋（SE1460　第5図2）
4. 陶器土瓶（SE1460　第5図1）　5. 白磁椀（灰白色火山灰上面　第19図3）　6. 土師器杯（L－I　第19図2）
7. 土師器杯（L－I　第19図1）　8. 青磁椀（L－I　R－2）　9. 軒丸瓦（L－I　R－30）　10. 軒丸瓦（L－I　R－187）
11. 軒丸瓦（L－I　R－3）　12. 軒丸瓦（L－I　R－186）　13. 軒丸瓦（L－I　R－185）
14. 軒丸瓦（L－I　R－188）　15. 軒平瓦（L－I　R－184）　　第30次調査：1～5、9　第34次調査：6～8、10～15

図版 2

1. 第20図 1　2. 第20図 5　3. 第20図9　4. 第20図10　5. 第21図 1　6. 第21図 5　7. 第21図 6　8. 第21図 7　9. 第21図9
10. 第21図10　11. 第21図13　12. 第22図 2　13. 第22図3　14. 第22図11　15. 第22図12　16. 第23図 1　17. 第23図 2
18. 第23図 3　19. 第22図 8　20. 第23図 8　21. 第23図10

報告書抄録

ふりがな	たかさきいせき
書名	高崎遺跡
副書名	―新田南錦町線関連遺跡発掘調査報告書―
シリーズ名	多賀城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第65集
編著者名	齋藤　稔・石川俊英
編集機関	多賀城市埋蔵文化財調査センター
所在地	〒985-0873　宮城県多賀城市中央二丁目27番1号　TEL022-368-0134
発行年月日	西暦2002年3月25日

所収遺跡(ふりがな)	所在地(ふりがな)	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
高崎遺跡(たかさきいせき) (第29次)	宮城県(みやぎけん) 多賀城市(たがじょうし) 高崎二丁目(たかさきにちょうめ) 地内(ちない)	042099	18008	38度 17分 37秒	141度 0分 12秒	平成11年 3月16日 ～3月26 日	264㎡	道路建設
高崎遺跡 (第30次)	宮城県 多賀城市 高崎二丁目 地内	042099	18008	38度 17分 37秒	141度 0分 12秒	平成11年 5月28日 ～8月6 日	900㎡	道路建設
高崎遺跡 (第34次)	宮城県 多賀城市 高崎三丁目 地内	042099	18008	38度 17分 44秒	141度 0分 13秒	平成12年 6月26日 ～10月11 日	1.700㎡	道路建設
高崎遺跡 (第35次)	宮城県 多賀城市 高崎三丁目 地内	042099	18008	38度 17分 46秒	141度 0分 14秒	平成12年 10月5日 ～11月16 日	400㎡	道路建設

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
高崎遺跡 (第29次)	集落跡	平安時代 近世	溝跡 井戸跡	土師器、須恵器 瓦	
高崎遺跡 (第30次)	集落跡	平安時代 近世	竪穴住居跡 溝跡、土壙 井戸跡、土壙	土師器、須恵器 白磁、瓦 近世陶器	
高崎遺跡 (第34次)	集落跡	平安時代 中世以降	溝跡 土壙 掘立柱建物跡	土師器、須恵器 須恵系土器、瓦 灰釉陶器、木製品 青磁	第12次調査で発見した区画溝の南側延長部分を発見。 関東系・畿内系土器、多量の墨書土器などが出土。
高崎遺跡 (第35次)	集落跡			須恵器、土師器 瓦	

多賀城市文化財調査報告書第65集

高　崎　遺　跡

―新田南錦町線関連遺跡発掘調査報告書―

平成14年3月25日発行

編集　多賀城市埋蔵文化財調査センター
　　多賀城市中央二丁目27番1号
　　電話　(022)　368－0134
発行　多賀城市教育委員会
　　多賀城市中央二丁目1番1号
　　電話　(022)　368－1141
印刷　今野印刷株式会社
　　仙台市若林区六丁の目西町4－5
　　電話　(022)　288－6123